魔剣姫と二重人格

亡霊の王

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

崩壊戦争から約５年後

西側方面の新帝国、東側方面の聖都と世界は二つに大きく分かれてしまう。

偶然にも何故か主人公の『鐵龍牙』は聖都の王族の一人の姫君『エルティア・オルフェン』のボディガードとなってしまう。

そしてこの二人の出会いから運命は大きく変わっていくのである

目次

第1章　不幸過ぎる男
プロローグ ―― 1
第一話　とある姫とメイドの朝 ―― 4
第二話　なんでも屋 ―― 8
第三話　最悪の出会い ―― 12
第四話　依頼内容の理由 ―― 17
第五話　魔力絶縁 ―― 24
第六話　呆気ない終わり方 ―― 31
第七話　王女の憎悪 ―― 35
第八話　聖焔学園の生徒 ―― 41
第九話　旗争奪戦 ―― 51
第十話　騎士と執事 ―― 64
第十一話　生徒になりました ―― 68
第十二話　生徒会長 ―― 71
第一三話　問題の解決とは？ ―― 76

第1章　不幸過ぎる男

プロローグ

少女は空を見上げていた
吸い込まれそうに深い夜空を、少女は呆然と見ていた
街中は赤い色で満ちていた
ゆらゆらと一面に広がっている、血のように赤い炎が延々と燃え上がっている
キン‼?っと鉄と鉄が弾き合う音が聞こえてると思えば
南西方面からは少女から見れば鉄の塊が何かを落としてるのが目視できる
その数秒後には爆破と同時に爆風、爆音が一斉に襲い掛かる
そう今は星一つを巡っての戦争である
後にこの世界最大の戦争の事を崩壊戦争(フォーリナー)と呼ぶのである
『なぁ…そこのガキ?逃げないのか?』
不意に背後から声をかけられ、少女はすぐさま振り返る
青年が立っていた
元々は白い服装だったのだろう今は真っ赤に染まっている
しかも声は青年のはずなのに白髪にエメラルドグリーンのような緑色の瞳だが飢えた獣と見紛うほどのギラついた目で少女を見つめている
だが、少女も黒い装束服を纏い、虚無の瞳を少女は別段怯えた様子もなく自らも視線を青年に向けた
『貴方なの?……この一帯を…人々を…殺したのは…?』
『あぁそうだよ?…と言ったら仇として討つか?良いぜ?かかってきな?』
青年は少女の問いに揺らぐどころかそれはそれは満面の笑みを浮かべ楽しんでいる気配を感じる
『……なら……ここで殺していって』
『何だと?』

少女の呟きに青年は眉をしかめる。
『帝国が滅びてしまうのなら、私の居場所なんてない、何処にも残っていないからーー』
青年は少女の呟きを聞き、少女の憂いをしばし見つめ
『……はは…くはははは!ああ何だ!そうか!お前はそういう人間なのか‼?何という事だ‼?まだ傑作がいるではないか‼?!ははははは!!!!!』
突然、額を押さえて、狂ったように笑い出す。
それでも少女、反応すらしなかった。
『なんだ…あの一族成功させているじゃないか…何が失敗しましただ…完成してるではないか…だがまだ覚醒してないか?…いやしかし…』
青年は急に冷静になりぶつぶつと独り言を言い始めてると突然、
青年は懐から何かを取り出すと少女に近づくとプスッと少女の首元に緑色の液体が入った注射器を刺して流し込んでいる
『なぁ…に…そ、…れ…』
『くれてやるよ。コレはお前の運命を変える『力』だ…そうだな…この戦争は直々終わるそして大陸は二つ確実に別れる…あぁ絶対にだ…だから逃げろお嬢サン…お前は逃げろ絶対に生きろよ?そして楽しませてくれこの俺なぁ…』
少女は既に意識が朦朧としていたそうあの薬らしきものせいで身体は重くなり力が入らなくなり苦しむ顔をが浮き出ていく
その少女の姿を確認すると不敵に笑みを浮かべそのまま踵を返し燃え上がっている城に歩いて向かう
『ま、…って…』
『あ?…動けるのかお前…スゲェな』
苦しみながらも少女は意識を持ちながら青年に声をかける
『アレは…なに?…』
そうアレは城の天辺に立ってきた
無敵不敗の帝国の伝説を砕き散る黒いモノは立っていた
それを目掛けて一斉に砲弾、またや魔法の類を放つと空が一面光出

すがその数秒後にはそれを目掛け打ち出した兵器は、原型が無くなるほど壊れスクラップになり、詠唱をした魔法使い達は全身から血を流しながらそのまま地に伏せている

少女は一体何があったんだと呆然と見つめている

『さぁね?…大半の生存している住民には『神』と言った方が正しいだろうな…だがアレはな『悪魔』だな』

『あく…ま?……』

『そうだ悪魔だよ……おっとお喋りし過ぎたな…ほら眠っとけ大丈夫だお前は絶対に生きてしまうな…あばよお嬢サン』

そのまま炎に紛れて消えてしまう

少女は意識が朦朧としながらこう考えていた

『(一体私はどうなってしまうんだろう…お父様…)』

そして少女は意識を手離す

第一話　とある姫とメイドの朝

「は⁉？……って夢か…またあの夢なのね…なんで今日という日に限って思い出しちゃうかな」

少女…いや彼女はエルティア・オルフェンは豪華なベットの上で汗をかきながら起きそのまま真横にある時計を見ると、現在時刻６時２５分と至って普通の目覚めであるが、

「…まずい…まずい⁉？いや普通に寝坊じゃない⁉？…ていうかなんで目覚まし鳴らないの⁉？」

と姫とは思えない慌てぶりである

「あーもーなんで目覚まし鳴らないのかなー…」

そのまま目覚ましを取り少し見ると

「あ、そもそも設定しないで寝ちゃたのね私…昨日は本当疲れてたのね…もーいいやもう少し寝よー。」

起こした体を再びベットに寝っ転がる。そのままもう一度夢の中に行こうとすると

ドカン‼？‼？と音がすると、何という事でしょう扉が滅茶苦茶に壊れているのではありませんか。これには流石に夢の国に行こうとした姫様も

「何事⁉？てかなんで扉吹き飛んでいるの⁉？」

「やっとお目覚めになりましたかお嬢様」

そう扉を壊した本人がスッと何も無かったように入ってくる。

彼女はクレハ・ハーミット

見た目は珍しい白い髪で本人曰く地毛と言ってる。

身長は１６８㎝、聖都が設立された直後から私の専属のメイドなりこの城内のメイド長を務めている。そして私の始めての友達であるが、これだけは彼女に伝えたい事がある。

『ねぇ？クレハ？何で朝から扉が吹き飛んでいるのかしら？多分城内はパニックだと思うけど？』

「そこはご安心ください前日に焔心（グレイズ）の許可を得てるので」

「あ、そう…って何故起こすために焔心（グレイズ）使ったのかしら⁉？」

「お嬢様の反応の撮ってくると言った条件の下行いました…反応良かったですよ……フフ…」
クスクスと笑っているクレハ
しかしその片手には人間の頭をトマトのように砕け散ってしまう位の威力デザートイーグル《メイデン》平然と持っているので彼女は中々恐ろしいことをやっているのである。

ーーーーーーー

焔心(グレイズ)それは崩壊戦争が終戦してその数ヶ月後に突然2歳から８０歳と言った性別関係なく子供、大人から自らの身体から炎が燃え上がった謎の現象である。
しかしその燃え上がっている老若男女は熱くないと言う証言を貰うと同時に例外なくとある変異が発生した
そう自らの手に見覚えのない物を持っているのである。
時には剣、槍、弓矢などが手元にある場合もあるが、中には
箒、筆、本、挙げ句の果てには、靴を持っていた人が現在確認されている。
だがそれが普通の武器、日常品あればの話である。
剣は一振りするとまるで紙を切り裂くように岩が簡単に斬れたり
槍はあらゆるものを貫き通し破壊を尽くし。
弓矢はどんな距離さて風があれば関係なく命中する
と言った普通ではあり得ない事が起きている。
人でありながら人を超えた奇跡の存在である。
そして焔心(グレイズ)を意のままに操っている者を焔命者(エネミー)と呼ばれる者達である
だがこのまま焔命者を放置してしまうと、小さな子供の焔命者が利用されてしまう可能性があり、そのせいで再び崩壊戦争よりも酷い事が起きてしまう。
そこで大きな力には相応な責任が伴う。その一つが魔導焔命制度(まどうえんめいせいど)である。

魔導焔命制度とは新帝国、聖都が唯一共通させてるルールである
新帝国、聖都のどちらからの国際機関の許可を受けた焔命者（エネミー）の専門学園からを卒業した場合した者のみ『許可証』と『魔導焔命者』という権利と社会的立場を与え、能力の使用を認めると言うことだ。
そしてここ、城塞都市《クロス　フィールド》内の中心部
聖学焔命学園略して《聖焔》である。
若き焔命者が『学生騎士』として日々己の技を磨き、鍛えている。
勿論この学園に来たには男女関係なく全て平等にされるが、
王族の一人の姫がこの学園に通っているがそれも関係なく平等である。
「で？お嬢様今日の鍛錬はどうしたのですか？珍しい５分前には中庭で鍛錬しているはずのに…しかも」
クレハはそのまま目線を下に向けると何故かこの場にあるはずのない大きい風呂敷がポンっと置いてあるのである。
その目線に気づいたエルティアはさっとベットから降りて動き風呂敷をベットの下に押し込む
「な、なんのことかしら…ね…」
「今更隠しても遅いと思うのですがそれは？…別に王妃達には言いませんよ？目的はなんですか？」
『目的ある前提で会話を進めて来たし……まぁ…合ってるからいいけど…フフなら良かった…私の目的はコレよ‼？」
風呂敷から取り出したのは一枚の紙であり詳細はと言うと
『「朝一番‼？出来立てホヤホヤのメロンパン‼？限定２５０個‼‼‼‼」』と大きな文字で書いてあるのである。
…取り敢えず姫様の事の言いたい事が分かる
「つまり鍛錬サボってこのメロンパン買いに行こうとしたのですね？」
「……はいそうです。だって‼？メロンパン食べたいんだもん‼？」
「はいはい駄々捏ねないでください…鍛錬を終えたら一緒に行きましょう」

「……どうせまた説教……ってえ？」
クレハから意外過ぎる言葉が出てきて軽く思考が停止しかけている。
あの堅物過ぎたり突然ゆったりとするクレハが一緒に行きましょう…だと…⁉？
「お嬢様何故か私が馬鹿にされた感覚があるですかそれは？」
軽くノエルから威圧を感じたエルティアはブンブン‼？と大きく首を横に振って否定をし続けた。
「…まぁ良いでしょう…なら支度をしましょうか」
「もう一人で出来るわよノエル…私もう１６歳よ？子供ではないわよ…？」
「まだ未成年ですよ？しかも駄々を捏ねる所を見ると、まだ子供だなっと思ってしまいましたね。」
再びクスクスと笑うノエル、そしてその笑っているノエルをプクゥっとほっぺを膨らみしながら見つめているエルティアのであったのだ、
しかし何故ノエルが一緒に行こうと言ったのか…
それはノエルも軽く都合が良かったのだ…そこでとある方と会う予定なのだから……

第二話　　なんでも屋

同時刻６時２５分
まだ時期は春だが外の気温は普通に寒い、だが彼は汗をかいていた。
「ぜぇ…ぜぇ……待ってくれ…早いから…少し休憩…ああ…待ってくれ⁉?」
別に彼…鐵龍牙はそんなに貧弱な体力ではないし、身体は至って健康体である、では何故息が上がっているかと言うと、
まぁ無理もないだろう…片手に小型犬４匹、もう片方の手には大型犬を２匹と計６匹に引っ張られて、今現在たった２５分の間に５ｋｍを全力で走らさせれているのだから
彼はまだ１８歳だが、流石に朝早く起きていきなり犬の散歩をして、全力疾走は疲れるだろう。
この後もまだ仕事があるので愚痴を言いたいが彼は既に慣れているので気合いで乗り切っている。

「これはありがとね～リュウガ君～いきなり頼みごとしてしまったねぇ」
「いえいえ…おばぁちゃんには犬６匹の散歩は、中々辛いと思いますので…仕事を依頼されたので、まぁ僕になっては朝のランニング程度で良かったですよ。」
「そうかい…そうかい…ならなんで頭に葉っぱや身体が泥だらけなのかしら?…犬達には泥は全く付いてないけど…?」
鐵龍牙には少し困った事がある。
運が全く持ってないのである、今日の散歩中（なの言う５ｋｍ全力疾走）にまず、最初は無料開放されているドッグランで走って貰おうとするがその途中４匹の犬のリードが同時破損そのまま脱走
その２０分の間は水溜りに足を突っ込み、木々に隠れている犬を見つけたりと忙しい男なのである
「あ、そうだお茶飲むかい?喉乾いてるでしょ?」

「いえいえ、この後も依頼があるのでお礼だけ受け取りますね。」
　そうかい、と渋い顔をするおばあさん
「ではこれで…次の依頼をお待ちになってますので‼?」
　そのままある場所へと再び全力疾走するのである
　ーーーーーーー
　ダダダッと階段を駆け登りそのまま飛び込みをする勢いで扉を開ける
「…ふむ連絡した通りに来たな龍牙、大変よくできました。」
　パチパチと部屋に虚しく響いて聞いてる方が少し悲しくなってくる
「だ、誰が…はぁ……散歩が終わった丁度に…連絡で[依頼が再び来た至急帰還するように]…ですか…珍しく急に送ってくるので驚きましたよ‼?…だから走って来たのに…」
　そのままトホホと悲しみで座り込む龍牙だが、すぐに立ち上がる。走った時は座らない方が良いのだと昔学んでいるのである。
「で?なんの依頼ですか?紗耶さ…ではなく聖焔学園理事長、九条紗耶先生?」
「何取り敢えず言わせろ、いつになったら正式な仕事を見つけるだ?」
　そうなのである、彼は既に19歳もう今年には二十歳になるのである、
　彼だって安定な仕事を見つけたいだろうと思っている、こんな頼まれたらやるみたいな事は早く避けたいのであるのが
「いやだって俺まず、聖焔卒業してないし何より入学する資格持ってないんですよ?」
「そうだ、だから私が直々に依頼等をお前に送っているんだろ?…私も忙しくなる時期だ、お前も4年間も私の側で働いただろ?そろそろ仕事を個人的にやってくれ。」
　この部屋は思いっきり禁煙室の理事長室だが、煙草を取り出すと指先から火を出してそのまま煙草に火を付けてすっているのである。
「本当俺も魔術師に産まれれば楽だっただろうなぁ…」
　魔術師

崩壊戦争中、いや戦争が起こる前からあったものである。
私生活には重要なものであった、しかし崩壊戦争中に国の為に闘い亡くなってしまい、生きている魔術師は約４割しか存在していないのである。
そして魔術師と焔命者には決定的な差があった。
魔術師は焔命者（エネミー）にはなれない
焔命者も魔術師にはなれない。
それは何故かというと、仮に一つの結論が出ている。
魔術師は、あらゆる事に手を染めてしまい魂が穢れている為発症はせず、焔命者（エネミー）になったものは、穢れていない純粋な魂のせい、というのが最有力候補らしい
「ふーん…結構苦労するぞ～魔術師なんてよ勉強怠いしな…てかお前は焔命者だろ？焔心持ってるだろ？」
「俺の焔心の形を知って言っていますか？」
はぁと軽くため息を吐きジト目で見てる
「…まぁ良いそんなこともう終わりだ、では依頼内容を伝えよう、依頼主は私、九条紗耶（さや）直々の依頼だ」
その言葉を聞くとだらしない姿勢をすぐに聞く体制になる。
龍牙にとって紗耶の依頼なんて、４年間の間に一回も依頼などされた事がないのである、
一瞬嬉しい気持ちは出た、しかし冷静になる
あの紗耶からの依頼…凄く嫌な予感がする。
「依頼内容はこれだ!!!」
ドンッと机から取り出したのは一枚の紙、書いてある内容は、
『「朝一番!!?出来立てホヤホヤのメロンパン!!?限定２５０個!!!!!」』
と書いてある。
「……まさかね…理事長からの最初の依頼内容がメロンパンの購入…？それってさ」
そうつまりだ、俗に言うパシリである。
「ほら二個買ってこい」
指で硬貨を弾きそれを難なく受け取る龍牙

「…二個って俺の分？」
「な訳ないだろ？妹の分だよトカゲ、ほら開店まであと２０分だぞ言ってこい、あとで連絡するから連絡が来たらその場で待機な？」
龍牙はゆっくり恐る恐る、部屋にある時計を見ると、
午前７時１０分である、
そのメロンパンが販売している店からのここ聖焔理事長室までの距離、４．３㎞
「……また全力疾走かよぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!」
再び扉を蹴り飛ばして全力で理事長室から出て行く龍牙、その瞳からには軽く一粒の汗が流れて出ているのであった…
その様子を見てニコニコしている紗耶は、懐から携帯電話を取り出しとある者に連絡をかける。
「おはよ…そちらも元気か？…うんうん…へぇ…順調に進んでるのか？…ならお前の依頼はＯＫだ…だから今私の部下（アホ）が向かったよ？まぁ期待はしない方が良いな…アイツには色々と問題があるし…バレそうになるから切る？…分かったよ…では店にちゃんと来いよ？ノエル？」
ここから運命が少し動き始めた瞬間だった

第三話　　最悪の出会い

同時刻７時１０分
聖都オルフェン城中庭内
「…ではまた……期待通りの方なのですかね…なんでも屋は…」
私、ノエル・ハーミットは少し心配をしている。
九条理事長からの直々の者が向かっていて待っていると言ったが、それでも心配なのだ
細かく何が心配かと言うと九条紗耶の部下の時点で色々と嫌な予感がするのだ。
あの人は聖焔の理事長であり魔術師の講師でもあるのだ、勿論お嬢様も九条理事長の授業を聞いているらしいのだが、
お嬢様からの話を聞いているだけで荒々しい授業をしてるのである。
この時点で心配なのに、その荒々しい部下があの【なんでも屋】なのだから、
【なんでも屋】
［出来る範囲なら何でも屋にお任せ］と言うチラシがあちこちに何故が配られている。
住所等を書き、依頼内容を書きポストに入れれば、その依頼内容次第でその依頼をその通りにやってくれるのが【なんでも屋】なのである
実際に私では無い誰かが依頼し、あいつが何回か城内に入って依頼を遂行した経歴がある為中々の信頼はあるらしい
「…けど…しかし……ムムム……」
「何悩んでいるの?……顔が凄いわよ…剣幕な顔して…怖いわよ?,」
…は⁉?…声をかけられてやっと現実に戻る、お嬢様には相当怖い顔だったらしい
「ほら行こうよノエル～売れ切れちゃうから‼?」
既にエルティアは着替えていた
休日で朝の為目立たない格好を意識したのか瀟洒（しょうしゃ）な仕方ての白い

ブラウスの上に、春らしい明るい色のカーディガンを羽織ってる。
しかし所詮、聖都の王女様なので色々と目立ってしまっているのだが、ノエルは満足しているのでもう何も言わないようにした。
「では行きましょうか」
「…???ノエルは着替えてなくて良いの？」
ノエルは女性の筈なのに執事服を常に来ているのである
「良いのですよ？私のことは気にしなくても…お嬢様を守る為に動きやすい格好をしておりますので、肝心な時に守らないとメイド失格ですからね。」
「…大変ね…メイドも…」
少し悲しそうに見つめるお嬢様、良いのですよお嬢様、このノエルお嬢様の笑顔をそして、友達として守れるなら幾らでも身体を張りますよ‼？
「…またノエル…変な顔してるわよ？」
おっと…またまた顔に出てしまいましたか…これは反省ですね。
「こほん…では行きましょう…あと１０分で開店ですからってお嬢様？…」
そうお嬢様は残り１０分と聞いた途端、全力で走り出した。
そうノエルは知らないのだ、このメロンパンの為にどれだけの人が朝から並んでいると言うのを…
走りづらい服装を今更ながら後悔しながらお嬢様は朝から再び全力疾走なのであった…
ーーーーーーー
「ぜぇ…ぜぇ…あと少しか…買えなかったらキツいペナルティが待ってるぞ…」
龍牙はあれから全力疾走で走っていた、もうあと１㎞まで走って来たのであるが、この走ってる間にも、さっきまで着ていた黒いジャケットは寒そうな格好をしている老人に渡し、その際で半袖になり左腕には、さっき走っていたところをたまたま通り掛かった犬に噛まれて歯跡がくっきり残り、仕上げには顔には、風が突然吹き出して信号を待っている女性のスカートを捲り上げ中まで見てしまった龍牙は、

そのままビンタを食らうと言う、悲惨な事があったのだ。
　そのまま後３００ｍまで来ると待っている行列が一気に店内に流れ始めているのである。
「……ヤベェ本格的に買えなく怒られる未来しか見えない‼?……」
　走ってるペースを上げてそのまま店内まで滑り込みで入り込む、
　店内はもう既にメロンパンに人の流れが向かっている
　そして龍牙は見た、最後の一個のメロンパンが置いてあるのを‼?
「(一個しかないが最低限のまでのペナルティで抑えられる‼?これは貰ったぁぁ!!!!)」
　すぐさまトングを取ってメロンパンにトングが届く瞬間
　トングとトングが当たる音が響く
　誰だ?と思いながらその相手のトングの先を追うと、
　そう女性がいるのである。しかも美人で背は低くで髪は黄金色(イエローゴールド)で見た目はそう可愛らしいの一言で言えるが、今は違う
　彼女も汗をかき髪が乱れながらもトングを取ってメロンパンを取ろうとしてるのである。

ーーーーーーー

　彼女、エルティアはあの後全力で走り切った。学生だから走る事はあるが、ここまで全力で走る事は滅多に無い為軽く息が上がっているが
　フラフラしながらも店内に入ると、そう密集して熱気が凄いのであるが、普通の女性ならこんなに密集しているところは入りたく無いと思うだろう。
　しかしお嬢様はそんなの気にせずに突入し、目に入ったのは、たった一つのメロンパンである。
　彼女のカンが囁いていた『あれを逃したら次は無いぞ』と
　その瞬間に彼女は動いていた、　人の流れを読むようにトレイを受け取り、流れるようにトングを掴みそのままメロンパンに手を伸ばす
「(朝から頑張ったご褒美を今ここで‼?･)」

しかしメロンパンは取れなかった、別のトングが行く手を阻んでいるのだから
彼女も誰だ？と思いその阻んでいるトングを目線で追うと
男性がいるのである。しかも自分より大きく黒髪であり、しっかりとした目つきで、世間でいうカッコ良い分類に入ると思うが、今は違う
彼は汗をかいており、身体をよく見ると噛まれた跡やビンタされたと思う手の平がくっきりと残っているのである。
『『……』』
ギチギチとトングが軋む音が響く、
彼、彼女はこう考えているのである。
『『（最後の一個ぐらい見逃してくれよ（くれないのかしら）‼？）』』
だから二人は無言で睨み合う、お互いの使命を果たす為に‼‼‼
「あ、すいません…片しますね～」
え????っと二人の声が重なって背後を見ると、店員さんがメロンパンが置いてあるトレイを交換する為に来たのだが、そのまま残っているメロンパンも片してしまったのであった。
『『……』』
二人は思考がそのまま停止してしまった、無理もないだろう
彼は無理矢理行かされて買えなかったらギルティなのは確定であり
彼女は訓練をサボろうとして行こうとした為
訓練内容が軽く長引きしてしまった結果こうなったのである。
「（ヤベェ⁉？…どう言い訳するか今から考えない…と？）」
チラッと例の女性を見るとギョッとした。
そう身体中から黄金の気配（オーラ）が出ているのだ、しかも瞳で目視が出来るぐらい。
龍牙は勘付いた、この後自分にロクでもない事が降りかかる事を
それを回避する為に龍牙は声をかける
「…あのー大丈夫ですか…？」
「……なかった」

「…え？なんて聞こえないですけ…」
その一言がいけなかったゴッ!!?と更に気配が噴き出ていき
「貴方のせいでメロンパン買えなかったのよぉぉぉぉ!!!」
そのまま黄金に輝く右手で腹パン(ボディブロー)まともに食らうと、
叫ぶ事すら出来ずそのまま店内で崩れ落ちる。
この時意識が軽くなってきた龍牙は思った。
「(流石に今日は不幸過ぎるでしょう……)」
これが二人の最悪の出逢い(ファーストコンタクト)

第四話　依頼内容の理由

鐵龍牙は夢を見ていた。昔の夢を
自分が崩壊戦争に参加してもう1年半が経った時
自分は夜遅くに移動していた、そう任務を与えられたのである。
長老から直接の任務であった。
内容は［敵領地に侵入、その後敵の人数、資料、物資の確認後、敵の中心人物（リーダー）の殺害なお殺害方法は問わない］と言う文章であった。
渡された途端自分は支度の準備をした、長老からの任務でありそして自分の初単独任務であったからだ、だが単独はリスクは大きい
しかしこの身が我が国、鐵家の為ならなんでもやる
当時を自分はそう誓っていた。
この後自分は忠義を尽くしていた国に家に裏切られる事を全く知らずに…
そして彼は夢から目覚めた。

ーーーーーーーーーーーーーー

まず思ったのは知らない天井だった。
天井には綺麗な絵が描かれており、それは美しく見えると思う
次に右に首を傾けると、何故か九条理事長が堂々と立っていた。
「……」
満面の笑みで見つめているが、そのまま見なかった事して左に首を傾ける。
左にはそう金髪の女の子が心配そうな顔をして見ている。
「あ、起きた‼?…良かったよ…このまま眠ったら怒られるところだったよもー…」
と相手のよりも自分の事を優先に心配している彼女が居た
「やっと起きたかこの馬鹿…てか何故見て見ぬ振りをした?」
「いや?見て見ぬ振りなんてしてませんよ?」
本当だな?と思うぐらいガンを飛ばしてくる理事長

「てか…此処は？…ってお腹痛え…」
「あ、お腹痛いで済むんだ…」
物珍しいそうに見つめてくる彼女
「その前に君…誰？」
最初に名前を聞くのは常識の範囲内の筈なのに、彼女は突然悲しみの眼で見つめてくるのである。
「本当に私の名前を知らない人がいるんですね理事長先生」
「こいつテレビ、新聞なんて見る暇ない男だからな」
なんか素直に失礼な事を言われたしかも本人の目の前で、
「で？ここは？…見覚えのない部屋なんですけど…」
キョロキョロと見渡す。部屋が軽く薬品の匂いがするため、病院だろうと思ったが次の彼女の一言によって覆させる。
「ここ城内の看護室だけど？」
「……は？」
「事実だぞ？…まず私があの店に来た時にはお前は救急車に運ばれているところをついでに乗車して城内に入ったという事だ…話を聞いたところだと…姫様が何故か朝から事と、その真下に倒れ込んでいるお前がいる事でなんとなく察しが出来てるから安心しろ。後でペナルティな？」
「うわぁ…ペナルティ確定…かよ……ん？姫様？…」
スッと改めて目線を向けると
やはり何度見ても表面上は美しいさと上品な雰囲気を感じる。
綺麗な金髪色、小柄で白く細い腕だがあの腕から自分に放ったパンチだと思うと今になっても考えられない…
「おい…何ジッと見てる恥ずかしいからやめろ」
「あ、ごめん…ついつい見てしまったよ…てか君が姫様という事は…」
「そうだ改めて自己紹介だな聖都第一王女エルティア・オルフェンだ…お前の大抵な事は眠っている間に理事長聞いたから自己紹介は結構だぞ。」
「…ワォ…現王女様かよ……」
更にマジマジとベットからエルティアを見つめて一言

「なぁ?どこからあのゴリラみたいなパンチ出あぶへぇ⁉?」
「失礼します姫様…例の彼は起きましたか……」
ノエルが扉を開いた途端
思いっきり顔面を殴る姫様、そしてそれをまともに受ける龍牙、それを見ながら窓側で喫煙している理事長
そらを見たノエルは何度目か分からないため息をつくのであった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

午前１０時
城内のテラスに座る４人
また反射的に叩いてしまってその点で少し反省しているエルティア
テーブルの上に置いてあるティーカップに紅茶を注いでいるノエル
城内での喫煙禁止と言われながらも吸い続けている九条
そして顔に包帯をグルグル巻きになっている龍牙である。
ノエルは全ての紅茶を淹れ終えて余っている席に座る
「てかよ…九条理事長…何で俺は帰れないの?…てか包帯巻き過ぎな…」
そのまま絡まっている包帯を取っている。
「だって依頼が受けに来たに決まってんだろ?」
「いや俺聞いてないけど?」
パチパチと眼を瞬きする龍牙
「だって私も今から聞くからな……依頼内容」
龍牙の顔はマジですかという顔をしている。
「こほん…ではお話をしてもよろしいでしょうか?」
「おっと…すまないねノエル…で?依頼内容は何だ?私にも説明出来ない程の重要な依頼何だろ?」
ゆったりと紅茶を飲んでいるエルティア
「(あんたは聞かなくていいのかよ…)」と思いながら龍牙もちゃっかり飲んでいる。

『では依頼内容を説明します、お嬢様のＳＰになってほしいのですよ。鐵龍牙様』
「「ブーーーーーーー!!?!!?!?!?!?」」
龍牙、エルティア飲んでいた紅茶を吹いてしまう。
両者流石にマナーが悪過ぎる。
いや待て…それ以前にあのメイドはなんて言った?
ＳＰ?あのお偉いさんとかの側にいるサングラスをかけていてスーツを着ている奴で危険な時は身体を張って守る仕事だよな?
「いや…メイドさん何で俺がその姫様の護衛しろと?」
「私の名前はノエルです…あと拒否する場合なら」
ノエルが腕を上げると既に銃を持って龍牙に銃口を向けてる。
「このまま即時発砲しますが?」
満面の笑みで言うが恐ろしい事を言っている。
「待ってくれませんかね!??ノエルさん!??何でその姫様の護衛しないといけないの?その気になれば男性を仕留められる馬鹿力あるでしょ!??」
「…誰が姫様に向かって馬鹿力のゴリラですって!??」
「いや誰も言ってないぞ…姫様…」
あの二人の事はさておき…
「まず理由を教えてくれそれを聞かないといけない…あと銃を降ろしてくれ」
「…悲しい事を言いますとね…王妃の専属の方のジジイがいるのですが…」
「(ノエル…祖父の事を普通にジジイって言ってるし…)」
「なぁ…なんとかく察しが出来たんだけどよ…まさかさ」
龍牙の顔が軽く渋い顔をしてノエルを見るとノエルもその通りですみたいな感じが出てる
「ギックリ腰やったのか…」
「はい２日前に私がお嬢様のところに向かう時に倒れている祖父を発見致しまして…腰を痛めた原因は自分の懐中時計を拾おうとした結果、その勢いで腰を痛めたと祖父は言っています。」

何度目か分からないため息をついている。
「けどよ…その爺さんの代わりならそこは王妃の護衛の筈だよな？なんで姫様なんですか？」
「今日の昼に王妃は月一回の報告会がある為、一旦城から出て行くのですが…今回は延長するようなので、私が行く事になってしまったのです。」
「…何となく大変そうな事は分かったが…なら例えば王妃の護衛に俺に向ければ良いのでは？」
「それは駄目だ龍牙」
割り込んで来た理事長に、いや何でだと聞こうとするが、
パキンッとティーカップが割れる音がすると久々の圧力をくらい口を閉じる龍牙
「城内の情報は重要機密なんだぞ？…しかも相手は王妃、それを分かって聞こうとするのなら私はお前を殴るぞ？」
「…分かったよ…これ以上は聞かないよ…だから圧力を降ろしてくれ…姫様が軽くビビってるから」
ティーカップを持ちながらガクガクと震えている姫様と、警戒して銃を再び構えているノエルがいる。
そのままスッと圧力をかけるのをやめる
少し緊迫した後に言葉を発したのは龍牙だった。
「…まとめると…爺さんの代わりが私しか居ないから王妃の護衛等をしないと行けないから今の姫様の護衛に合う人間がいないから俺に頼ったと？」
「はいその通りです…では依頼内容は説明しましたので受けて貰います、拒否権ありませんけど…ですよね？理事長？」
チラッと理事長を見ると目を逸らしてる九条理事長
「おい…何やったんだ？九条理事長…なんかあんたの私情が関わっている感があるんだが？」
ジーと理事長の顔を覗く龍牙、眼を合わせないようにする九条
「九条理事長は約2週間前、式典後に飲むはずのお酒を一人でガブ飲み、酔いつぶれた所を私が発見して、その件は私が貸し一つと約束を

したので、つまり貴方は無関係なのに理事長の私情に巻き込まれたのですよ。」
（何言っているだノエル⁉？）と（明らかに貴女が悪いでしょ？）と言ってる二人を見て
「…後で理事長…お話聞かせてもらうとして、人手不足なのはなんとなく分かりましたけど…あーもう分かりましたよ…こういう巻き込まれるのはしょうがないとして、で？護衛期間は何日ですか？」
「3日間の間だけですよ…それではよろしくお願いー」
二人が話し合っているところをバンッとテーブルを叩いて立ち上がっているエルティアがいる。
「認めないわよ？こんなやつ一時的に護衛というか執事にさせるのを」
「しかしお嬢様…心配なのですよ私も…3日間お嬢様の顔を見れないと考えたらもう…ストレスで乱射しそうですもの…」
カタカタと身体を震え始め今にも暴走しそうな雰囲気が出てるノエル
その勝手に震えているノエルを無視して
「てか彼、私の事を守れるの？腹パンされて気絶した男よ？大丈夫かしら？…そしてメロンパン買えなかった原因…そして私男は嫌いなのよ…」
食べ物の怨みと男という点で気にくわないらしい、姫様とは思えない目つきで睨んだ後フン‼？と顔を逸らさせる。
『なら試してみるか？この阿保と闘ってみるか？』
九条理事長とんでもない爆弾発言をする。
『なるほど…』　『へぇ…？』『理事長⁉？』
女性陣二人は納得した顔をして、龍牙は何を言っているんだお前と言う顔になってる。
「姫様は弱過ぎてなら自分で守ってた方が早いと、そしてメロンパンの怨みがあるからそいつに、執事等やらせたくないんだろ？、なら私の学園のルールなら闘って決めるのが妥当だろ？姫様は？どうだ？」
「別に構わないわよ？…こんな男すぐに倒すから」

フンッと既に勝ち誇っているようか感じがする
「なら決まりだな…では確か城内に広い地下訓練場あるだろう？そこを使わせてもらうか」
「ちょっと待て⁉？」
と抗議しようとする龍牙であったが既に姫様とノエルは着替えて行ってしまった。そして伝言としては『一方的に叩き潰してあげるから覚悟しときなさい‼？』と殺意マックスの伝言であった。
格好…理事長？？？もう決闘決定ですが？」
「そうだな…何年振りだ？お前が闘うのは？…私は少しワクワクしているぞ。」
ウキウキしているぞ理事長を見て、はぁ…ため息をつく龍牙である。
「良いんですか？俺があの焔心使って？」
「お前の焔心が丁度良い加減になるだろ？…あとあっちの方も気になる。そいつは出てくるのか？』
「それは秘密なんでさて…行きましょうか…理事長」
この時龍牙は少しの雰囲気が変わっていた。
そう獣を狩る獣になっている事を、そしてこの後色々ヤバい事が起きるのは、誰も予報してないのである。

第五話　魔力絶縁

魔導焔命者、魔術師がその国の戦力として側面を持つ以上、当然戦闘技術が求められる。
国家間の戦争はもちろん、テロリスト《解放軍(リベールズ)》を始めとするテロ組織やら犯罪組織に対抗するためにこれらは必須だ。
故に聖焔の敷地内にはいくつかのドーム型闘技場が点在しており、内部には直径百メートル程の戦闘フィールドと、それをすり鉢状囲む観客席が設けられているはずなのだが、
「あの理事長…？…ここって」
「ここまで再現されているとはな…」
このオルフェン城地下施設にもその聖焔に似た、いやそのままリスペクトした闘技場があるのだった
そして、オルフェン城地下闘技場の中心に鐵龍牙とエルティア・オルフェンの姿があった。
レフェリー(九条)を挟み、二十四メートルほどの間を空けて対峙する両者。
そして、その二人を見つめるいくつもの視線が観客席にある。
元々この訓練場を使って聖都騎士団(ロイヤルガーデン)達がトレーニングをしていたり、姫様が何処その男と闘うと言う噂を聞きつけて見学に来た、メイドたちの視線だ。数はざっと二五人強と、みんな休日だから暇なのか、模擬戦の見学者としては数が多い。
「…なぁマジでやるのか？姫様よ？」
「勿論よ？てか今更やめますって言ったらわざわざ来た彼らに失礼でしょ？…てか女性に負けたら恥ずかしいでしょ？」
「建前はそれとして……本音は？」
「メロンパンの怨み此処で返してこんな依頼を無かった事にする!!？来なさい賢王の剣(ローグスタンス)!!？」
一気に黄金の焔(オーラ)が身体中から噴き出すと、両手で黄金の大剣を持っている。
「デスヨネー……って姫様って焔命者なのか…」
「今更降伏なんてさせないわよ!!？此処で色々と潰してあげる!!？主

に社会的にね‼?」
「だそうだ…ほら龍牙、お前さんもさっさと出せ…己の武器を」
「いや自分、武器なんて出しませんよ?」
「はぁ⁉?何言ってるの貴方⁉?」
突然戦闘放棄だと思えたが、次の龍牙の一言で姫様の怒りはピークに達する。
「だって、一人の女性に手を出したらダメでしょ?」
ブチっと何が切れた音がした主に姫様の方から
観客席から見ている城内にいるものは軽く青ざめた顔になってたり、ごく少数派には紳士的だなと感じてる者もがいる。
だかエルティアにはそれは明らかに実力を舐められている証拠であるのは間違いではない事は確信した。
「(今すぐ戦闘不可能にさせてやる‼?)」
「…では…始めるぞ……試合開始!!!」
こうして、エルティアと龍牙の戦いが始まった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ハァァァァァァ!」
開幕同時にエルティアは龍牙に向かって使い走り出したのだ
黄金を纏い大剣を大振りに力任せに振り下ろす、しかし大振りは大振り。
龍牙は相手の動きを見てそのまま後ろに回避しー
「ッ⁉?」
ようとする行動を中止して、真横に転がるように逃げた。
避けてさっきまで自分が居たところに《賢王の剣》が床に叩き付けられ、ずおんっ、と前方に向かって黄金の衝撃波が何度も続く。
「色々と言いたい事があるんだけどよ‼?…まずなんに焔命者なのにあんなパワーがあるんだ⁉?」
「だって魔力放出で振り回しているだけよ?」
「…どんだけ魔力量あるんだよ…」

ニヤッと笑い、追撃の構えを見せるエルティア
龍牙は間合いを取るために体制を整える。
あんな大剣で馬鹿力で叩き潰されたら、骨一本何処か、全身複雑骨折してもおかしくない。
しかし相手は焔命者であり未成年の女性、聖焔の生徒でも持久戦になれば有利のはず、あの勢いで続ければ２０分限界だろう、なら逃げ続けるのみ‼？
だがーーーーそんなことで収まる王族の怪物相手では無い‼？通用するはずもない‼？
轟、と風を鳴らして龍牙に接近しているのである‼？
「私に持久戦を挑もうとしてる？諦めた方がいいわよ、まず逃げ切ろうとしてる時点で負けよ？
魔力の使い方は攻撃以外にもあるのよ。足裏に集めて爆発されば機動力を向上させる事もできる。
そしてワタシの総魔力量は並みの焔命者なら三十倍、魔術師なら十五倍。アンタらみたいに残りの魔力を考えて行動する必要は無い。
しかもこの速度を維持してもまだ余るのよ‼？」
例えるなら、エルティア・オルフェンは『燃料無限の超機動戦車』である
その理不尽とも言うべき性能を目の当たりに、龍牙が苦笑いする。
「ヤベェな魔力量…本当に姫様かよ…今まで歳をとらずに戦場に生きている戦士と言っても分からないぞ…」
エルティアは闘技場を壊すほどの勢いの一閃の攻撃を振り回していく
そのまま連続で響く破壊音は集まった観衆の耳に響くのであった。

その一方的な試合を見ている観客は、彼女の勝利を確信して見守っているが一人、九条紗耶だけは龍牙の事を見続けている。
そこにノエルが九条のとなりに座る。
「私が依頼したのですが…彼にはやはり降りてもらうしか無いのでしょうか？…」

「良いや？安心しろ結論から言おうこの勝負龍牙の勝ちだ。」
観客にいる騎士団、メイドに聞こえるように言う九条。
それを聞いた一部の人間には非難殺到だが。九条は聞こえないように無視している。
「…なんでそんな事が言えるのでしょうか？九条様？」
「なぁに見てろノエル、次龍牙が攻撃する時姫様は防御してるぞ？」
「九条様？何を言って…」
「キャァァァァァァ⁉？⁉？」
突然エルティアの叫び声が聞こえてくるとすぐに視線を闘技場に目線を移すと、
そこには魔力障壁で身を守ったが闘技場の端まで吹っ飛んでいる姫様と既に抜刀しているが刃が一切無い刀を振るっているつまり木刀もどきを持っている鐵龍牙の姿があるのであった。
「さぁ…次からは龍牙のターンだぞ？姫様…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

彼女はイライラを通り過ぎで焦っていた。
そう彼女の大剣は当たればまさに一撃必殺である。
なのに彼は武器を持たずにスレスレのところを避けている。
一見簡単に言っているが彼女の剣筋は聖都設立直後からノエルと一緒に鍛えて上げていた剣技である。そう簡単に避ける筈がない、同級生と闘ったらその相手は動きに眼が追いつけずに大剣で潰されているのである。
それほどの攻撃を避けているのである。
しかもさっきの逃げ惑っていた彼の面影が無くなり、こちらの動きをいや剣筋を読んでいるの感覚がする。
「（そんな簡単に読まれるほど甘くないわよ‼？）」
大剣を思いっきり振り回すと龍牙はスッと避けて、間合いを取る
流石のエルティアも魔力放出の反動で肉体的に辛くなってきたので、少し休憩する。

「なぁ…？やめないか？こんな事をやっても無駄だと思うんだ…」
「……あ、貴方にはプライドはないのかしら？」
「なら…プライド捨ててこんな事終わるなら遠慮なく…捨てるよ…」
ぜぇぜぇと息を整えている。
「…貴方が倒れるまでやるわよ…絶対に‼？」
本当は龍牙の作戦しては、回避続けて相手に降参してもらうと言う考えだったのだが、これまで姫様の執念があるとは思わなず先に姫様に折れてもらう予定が龍牙が先に折れてしまった。
そして龍牙は此処でやっとエルティアを敵として見始めた。
だから龍牙は本格的にどうやって効率良く意識を斬り落とそうと考えた結果
片手を前に突き出す。
「来い《月印（つきしるし）》」
結論は意外と早かった。
彼の身体から蒼い焔が吹き出すと手元には綺麗な黒い鞘を持って、そのまま抜刀の構えをしている。
その目つきはさっき逃げ続けた者の顔はしておらず
そうまるで別人のような瞳でエルティアを睨んでいるのである。
「ッ‼？」
エルティアはすぐに分かった、相手は誘っているのである。このまま私が突っ込めばすれ違いに斬り倒させられる、このまま間合いを取っていれば体力を回復されてしまうと言った二つの選択肢が出てしまう。
普通なら間合いを取って隙あれば攻撃するのが一般的だがエルティアは、
「（ならその誘いを私は敢えて乗ってあげるわ多少相手の斬る力があったとしても私の魔力の障壁でそのまま斬れずに弾いてその隙に私の大剣で叩き潰す‼？）」
そのまま魔力放出で突っ込んでいく為足を一歩出した瞬間
「姫様ちゃんと防御取ってくれよ？」
え？今の声は⁉？と声が聞こえた思った瞬間には、

既にエルティアの目の前で抜刀している龍牙が居るのである。
「ッ⁉?⁉?⁉?」
咄嗟に一般の焔命者の張る魔力障壁の約三十倍の障壁を生み出す。
これなら彼の攻撃は効かないと確信したのだろう。
ガキンッ‼?と障壁と刀が接触する音が響いた、これはチャンスと思ったエルティアそのまま攻撃に転じようとした思った瞬間
接触した刀がそのまま魔力障壁を押し返してくるのだ‼?
「(ちょ⁉?なんで弾かれて体勢を崩してないの⁉?)」
「おぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!」
そして強引に障壁ごと吹き飛ばす
その勢いは凄まじく流石のエルティアも発狂するしかない。
「キャァァァァァァ⁉?」
その結果闘技場の端まで吹っ飛んでいるのである。
「…な、なによ…その馬鹿力⁉?障壁ごと吹き飛ばすとか…貴方も言えた事じゃないわ…って何よその焔心?…斬る為の刃がないじゃないの…」
エルティアが指摘した通り、龍牙の焔心《月印》には一切殺傷能力のあるはずの刃が無いのである。
「そうなんだよ…俺は未熟者でさ…だなら焔心も半端なものなんだよ…焔心は殺意を込めれば人を殺せたり出来るものだが…俺の場合は殺意を込めても殺せないんだよね…だって刃が無いんだから」
ははっとから笑いしている龍牙だったが、エルティアは一つ少し疑問があるのだ、
「ねぇ…?なんで私の魔力障壁ごと吹き飛ばす事出来たのよ?普通なら貴方の腕が折れているはずよ?…」
「いや…見えるんだよ色々と」
ぽりぽりと困った顔になってる。
「なにが見えるのよ?」
「魔力の流れだよ、どんな人もこの世にいるのなら絶対魔力が流れている、俺はその魔力の流れが見えてしまう体質なんだよ
だから魔力障壁で一番弱いところをぶつけたから軽々と飛ばせた

し、何より魔力はその人間の特徴を示すものだからね…色々と癖が見えるんだよね…例えば…姫様の剣筋とかね？」
「…はぁ⁉？いやなんで魔力で剣筋を読まれるのよ？可笑しいでしょ⁉？」
　猛抗議するエルティアだが龍牙は冷静に返した。
「太刀筋には心得を、型には歴史を語ると言った言葉があってね、
　それらの理（ことわり）に至れば、どういう技が存在し、どういうパターンを有してるのか、こちらの動きに対して追撃してくるのかを、それを把握するのは簡単なんだよね」
　易々と簡単に言っているが実際にこう言っているのである。
【少し見続けたらお前の動き、攻撃方法、コンビネーション、防御方法なんて丸わかりだ】と
　その事実に呆然としてるエルティアに更に追い討ちをかけることを言う
「あと姫様のなんだっけ？賢王の剣？だっけ？能力は知らないけどよ…その剣見てみなよ？」
「何を言って……え？なんで…私の剣が欠けているのよ⁉？」
　言われた通りに剣を見るとくっきりと剣が欠けて始めているのである。
「俺の焔心の能力でね…魔力を少しでも関わっている奴ならその魔力を奪い取る能力なんだよ」
「それかなり滅茶苦茶な能力じゃないの⁉？」
　それはこの場にいる誰もが驚いたことだろう
　当然だ、高い身体能力にあらゆる魔力の流れを読み取ると、蓄積された技術、英知を暴き、歴史を読み取られてしまうのだから。
　トドメを刺すように焔心《月印》の能力は今の時代の全ての者から奪い取る略奪の刀である。
「では姫様…行きますよ？」
　カツンと歩く音がエルティアにとっては悪魔の歩く音にしか聞こえないのであった。

第六話　　呆気ない終わり方

　エルティアと龍牙がいる闘技場は騒然となった。
『姫様が押されているわ』
『そんな事はないはず…』
『気のせいかなんかの偶然だろ？』
　とこの城内の者達の言葉を聞いてニコニコとしている九条紗耶
「ははは‼？あいつは私の部下だからな、その優秀な部下を持っている私も優秀なんだよ‼？」
　調子に乗って煙草を吸おうとする為煙草を取り出した瞬間に、ノエルの《メイデン》で煙草が塵となる。
「…ここは聖域の城内なのでこれ以上煙草吸うのならたとえ理事長でも頭を撃ち抜きますよ？」
　顔はにっこりとしているが背後に鬼のような顔が浮き出ているので、九条はちぇーとした顔で煙草をしまう
「さて姫様は龍牙の焔眼（インフェルアーツ）《魔力絶縁（ヴィラド）》を回避するんだ？」
「…何ですかその焔眼は？彼のオリジナルですか？」
「私が任命した‼？カッコイイだろ‼？」
「いえ…なんか可哀想に見えてきましたよ龍牙様が…」
　憐れみ目で見てからノエル対して（え⁉？カッコ良くない？名前…良いと思うだよなぁ…）軽く落ち込んでいる理事長を置いて、試合は続いている。
　既に試合は逆転していた、魔力の流れを読まれてその動きを封じられ一方的な試合が始まっているが、そこをエルティアは持ち前の総魔力量でなんとか障壁を貼る事で連撃を防いでいくが…
「姫様の敗北は時間の問題だな…魔力を《月印》に吸われ続けて魔力が底が尽きて終わりだが…あれこれ三十分続いているのにまだ尽きないとは…理事長のこの私も驚くしかないな」
「お嬢様は一応魔力量を考えていますが…そろそろですかね…お嬢様の奥の手を発動するのは」
「あの状況を挽回できる隠し玉持ってるのか？」

「まぁ見てれば分かりますよ…お嬢様しか出来ない芸当ですから」
その瞬間闘技場は黄金色とは別の鮮血の紅色に光り始めた
「おい…なんだよその剣…」
別にエルティアの焔心が二刀流ならそれでどう戦うか考えるし
実はあの大剣は魔力の塊で真打ちは剣では無いと言っても彼は驚かないだろう。
だが今姫様が持っている剣はさっき持っていた賢王(ローグスタンス)の剣ではない。
気配も全くの別物であり
片刺突剣(レイピヤ)状で持ち手は鮮血の紅に染まっていている
そして身体から放っている焔は黄金ではなく血のように紅い焔である
「この剣は私の二つ目の焔心よ…黄金の焔は聖都の為なら…この焔は私の憎悪みたいなものね…」
「二つ目の焔心？憎悪？…なんだそれ？…」
「貴方が知らなくて結構よ？この幻想(ホロウ)の戦姫(アタラシア)でさっさと倒してあげるから‼？貴方の焔眼の弱点分かったからね‼？」
ゴッ‼？‼？一気に片刺突剣(レイピヤ)に紅く光り出すその紅い光の奔流は約六メートルほどの一本の剣となってる。
「さっきまで撃ち合ってやっと分かった‼？魔力を奪われ続けたけど、貴方の焔眼発動中は一定の魔力量しか奪え取れない‼？ならその一定の魔力量を超える魔力量を使って叩き潰せば良い‼‼‼」
総魔力量を持つ彼女が最大限に発揮する
あらゆるモノの存在を許す気の無い滅死の一撃
彼女の賢王の剣があらゆる攻撃を防ぐ能力なら、幻想の戦姫の能力はあらゆる防御を貫き通すのだ‼？
「穿て、幻想の一撃《復讐の一閃(アヴェスタ)》‼‼‼」
地下訓練場の地面を破壊しながら突き出された紅き剣は、滅びの意味を知っていた。
『全員巻き込まれるぞ‼？逃げろ‼？』

観客席にいる騎士副団長が叫ぶと、何人かのメイドは悲鳴を上げながら逃げ始め、九条は崩れゆく訓練場を見て苦い顔をしながら煙草を吸っている、その様子を余裕な態度で見てる九条にノエルは焦った
「良いのですか⁉？・そんなに冷静になってて‼？・貴方の部下の人がお嬢様の殺意の焔眼を食らってしまうのですよ⁉？・」
圧倒的に全てを葬り去る一撃を見て九条はフーッと煙を吐きながら言った。
「…大丈夫だ問題ねぇよ…アイツが出てきてしまうだろうな」

ーーーーーーーー

エルティアはこの時既に勝利を確信していた。
まず双方の間合いが四十八メートル
敵が何をしようと、光の片刺突剣（レイピア）が届くのが先だ。
しかも相手は回避などせずに立っているだけであるから。
「（そのまま突き刺せ‼？・ただそれだけで勝利は私のモノだ‼？・）」
その葬り去る一撃の突き刺しは龍牙の腹に直撃
「ハァァァァァァァァ‼？・‼？・」
そのまま訓練場の壁まで突き刺して壁に衝突すると地響きが起きて砂埃が訓練場をかき消す。
見ていた者は勝利を確信した、しかしエルティアは突き刺すのをやめない、砂埃で倒れている姿が確認するまで突き刺したままにしてーー
「なぁ…これで終わりじゃねェよなぁ？」
「ッ⁉？・」
確実に復讐の一閃で突き刺したはずの龍牙がエルティアの横に立っているのである。
声のした方向に向かって再び突き刺すと
『誰に向けているんだ？女？』
次に回避どころが片手で復讐の一閃を弾き返す突然の身体能力にエルティアは困惑した。
「何よその動き…おかしくない⁉？・」

「ギャーギャー喚くな…女…もう面倒だ武器を下ろして寝てろ」
突然何を…思った瞬間にはエルティアは焔心を戻して地面に倒れていた。
「…いっ……何…し……た？…」
「……」
そのまま龍牙は冷たい視線でエルティアを見てたから訓練場から立ち去る。
エルティアはこう思った
「(アレはさっきまで闘ってた男なの？…)」
その考えを最後にエルティアの意識が落ちていくのであった。

第七話　王女の憎悪

「…んっ…？」
じんわりと、白い視界に滲み、エルティアは目覚めた。
目を開けると、映るのは見覚えのある天井とーーー
「やっと目を覚ましましたか。姫様…」
エルティアが横たわるベットの側に座り、林檎を皮を剥いている執事服を着ている龍牙の姿があった。
「えぇ今起きたわよ……って待ちなさいよ‼？」
「どうした？姫様？起きて早々に元気だな…ほらウサギちゃんに切っといたから食べるか？」
スッと切ったお皿に乗ったウサギ状に切った林檎を渡す。
「良いわよ別にお腹減って…」
ギュルルルルと可愛らしいお腹の音が部屋が響く…
その音を聞いてしまった龍牙は赤面してる姫様に向けて暖かい目で見てあげてる。
「もう一回聞くけど食べる？」
「……た、食べます…」
そっと切ったリンゴを受け取り、しゃりしゃりと食べ始めお皿に乗ったリンゴをが無くなりエルティアが落ち着いたところで
「で？早速だけど貴方に聞きたいことが山ほどあるんだけど？」
「いやその前に俺から一個質問させてくれ、それが終わったら答えてあげますから」
「知らん‼？王女の私から先に質問する前になんだよその紙袋は？」
視線の先には紙袋があり甘い香りの匂いがする。
「そうですか…質問させてくれたらメロンパンあげようとしたのに…」
「分かりましたので先に質問して良いからそのメロンパンください」
ーーーーーーーーーーーーーーーー
袋の中のメロンパンを全部ペロリと食べてしまった。
一つで結構お腹いっぱいあるはずなのに４個も食べていた、別に

太っては無いし所々も普通の体型なので案外大食いなのかもしれな
い
　既に外は暗く時刻は6時半になってしまっている。
「夕食は食べるのか?」
「遠慮しとくわ…4個食べちゃったから満腹だから良いのよ…さて質問するならしても良いわよ?機嫌が良いから聞いてあげるわ」
「まずなんだあの焔心(グレイズ)は?二刀流なら分かるが明らかにまず明らかに大剣と片刺突剣(レイピヤ)じゃ重量も形状が違う、そして憎悪で生まれた焔心ならその憎悪は一体なんだ?」
「いきなり核心に着きに来るなんて色々と早くないかしら?。」
「俺はそれしか興味しかないからよ、ならさっさと聞いた方が早いと思った。」
　その本心を語る彼を見て少々呆れているエルティア
でも彼女も彼に質問するならさっさと核心を着きに行くだろう。
　わざわざ怠いことはしたくない者なのだから。
「崩壊戦争の引き金を引いた奴知ってるからしら?」
「エドワード・メイガスですよね?」
「そう正解、旧帝国の時には別名《賢人幹部》言われてそしてその父の娘よ?」
「…何言ってんのお前」

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

エドワード・メイガス
彼は当時の帝国の中で2番目に権力を持っていた王族の一つであ
り
頭脳、身体能力、観察力、カリスマ性、民衆にも愛されていた為
次に皇帝になる筈だった男である。
「でも彼は……」
「そうだ、危険過ぎる魔導核弾頭を彼が製作してた事にされた。」
「していた事にされた?」

最後の言葉に違和感を感じた。
「どう言う事ですか？」
「アレは帝国全体が製作していた兵器だ、それが内部でバレて他国から抗議があった。その製作関係者から私の父が選ばれた、つまり国に売られたんだよ私の父は」
エルティアはグッと握り拳を作ってた。
無理もないだろう帝国の為に働いて民衆にも愛されてた父が突然魔導核弾頭の関係者として無実の罪を受けたのだから。
「最後に父はその発言が引き金となった。」
エドワード・メイガスは国際裁判の時にこう放ったのだ
『私は製作していた魔導核弾頭を５つの内一つを今日放った』と
当時のその場にいた者は冗談のつもりで言ってたのだろうだが、彼の発言後から３分後に東太平洋の海に一つの魔導核が起爆し、海を崩壊させたのだから。
現在も最初に起爆地点の海は黒く染まり誰も近づけない状態である。
「そこからが起点となった、各国家は魔導核を奪い新たな力を付けようとして戦争を始めたのは…」
「……」
「そこから崩壊戦争が始まった、悲しいものよね…何故父は魔導核を発射してしまったのか…私には分からない…その後私は帝国内に避難している間にメイガス家の一族は私以外に死んで、確か戦争が終わって１年後に今の王妃様に養子として入れられた…理由なんて簡単代わりなのよ私…また父のように重要機密がバレたらまた冤罪を受ける身なのよ……って聞いてる？」
妙に静かだなと思いエルティアは龍牙に目線を向けると
「……ｚＺＺ」
いるボロボロの手帳になにかを書いてスースーと吐息を立てながら椅子に座って寝落ちしているのである。
「…本当顔は整って良い顔なのに色々と台無しね」
スッと寝落ちしている彼の頬を細い手先で触れている。

彼女も年頃の女性、好奇心が少し湧くのもしょうがないのである。
触れている間に手帳が床に落ちてしまう。
「なんで書きながら寝落ちするのかな…てかまだ7時10分ぐらいよ？
さっき戦ってるし彼の魔力量が半分だから結構苦労するのかしらね…」
ベットからこっそりと降りて手帳を拾うとパタンっと一枚の紙が落ちた。
『ん？何かしらかの紙…』
きっちりと半分に折られているのを綺麗に開けてみる。
それは一枚の写真だった、けど彼女は更に困惑した
燃えて無くなってしまったはずの家族写真である、この時点でおかしいのに更に不可解な事が発生した何故か父の隣に白髪の男が一緒に写っているのだから
「なんで…なんで貴方がの写真持っているよ？」
「なに人の手帳を漁っているんだ？」
「ッ⁉？」
恐る恐る背後を見ると寝ていた彼が起きてた
反射的に自分のベットの下にその写真を隠してしまった。
彼は欠伸をしながら着ていた執事服の袖をまくっている。
『…王女の前でその様な格好は失礼よ？』
『…普段慣れてない格好だと辛いんだよ』
パタパタと胸元を扇いでいるとやはり運動している男性のせいか鍛え上げている胸元が軽く見えてしまってる。
「……だらしないわね…」
「???…結局なんで憎悪が生まれたんだ？』
「話が逸れたわね…なんで生まれたかって？私はすぐに王女にされた途端、父の遺体の状態を聞いたのよ」
「多分帝国の刑だと確か…絞殺刑で死んだのか？」
彼女は顔を横に振るう仕草を見せると龍牙は疑問に生じた。
「なんだと？…じゃぁ殺されたのか？」

「えぇ…聞いた所身体が半分切断された状態で発見されて断面図には魔力(マナ)の粒子が残ってたらしい…つまり更に父は斬り殺された…その事実を聞いた途端私は憎しみを覚えたわ…そこからよ…此処の部屋で私の身体が新たに燃え始めたのは…」
彼女は無意識に紅い気配(オーラ)を放っている。
彼女の紅い理由は此処で明白に分かった
「つまりアレか…人間が憎いのか?帝国の為に身を呈したのに、犯罪を犯した者と分かったら誰も救いの手を伸ばさないで殺されたのが憎いんだな?』
「えぇ…私は憎い…今生きている人間達が何よりも憎いのよ…」
彼女の怒りは龍牙にも分かる、その国の為に働いて任務を遂行し続けた結果、最終的に捨てられ殺されるのはなんと憎いのか…自分にはとても分かる。
ピピピピピピピピピピピピピピ!!?!!?!!?!!?
と静寂だった部屋に目覚ましが鳴る音が響く
「…誰よ目覚まし設定したのは!!?」
「…それ俺ですね…そろそろ色々と準備があるで此処で帰りますね」
それでは帰ります。と言って扉なら手をかけると首元に賢王(ローグスタンス)の剣の剣先が置かれた。
そしてゆっくりエルティアの方を見ると彼女は敵意を示している。
「何ですか姫様よ…俺はほかの仕事をやらないといけないんですけど?」
「私は質問に答えたなら次は私の番…最後のアレは何?私の焔眼(インフェルノアーツ)を素手で止めた者はいないわよ?」
「……あーバッチリ見てましたか…」
「えぇバッチリ見てた…そしてよ最後の魔力は何よ?貴方の魔力量は理事長先生から聞いたけど通常の焔命者の半分の魔力と聞いたけど…でもあの時は禍々しい黒い魔力だったわよ?説明してくれるからしら?」
またも重い空気に包まれるが先にガチャと扉が開くと
「何しているだ?お前ら」

「り、理事長先生⁉？何で此処に⁉？」
学園に帰った筈の九条紗耶が部屋に入って来たのだった。

第八話　聖焔学園の生徒

此処で何故か関係のない筈の理事長、九条紗耶がいるのだろうか。
エルティアには訳の分からない事が発生したがなんとか思考を動かして言葉を発した。
「どうやって城内に入ったのですか？関係者等でも入れない筈なのに…」
「そうだな…まず飛んでから城の壁を音を立てずに破壊して入って来た。」
彼女はとんでもない事を言いやがった。
まず聖都騎士団達（ロイヤルガーデン）が定期的に見張っている。並みの魔術師、焔命者以上の実力者であり確実に魔力残留も見逃す訳もない
更に大人数での魔術結界重ねて圧倒的な防御壁が展開されている。聖都騎士団達の魔力反応にも当たらず城の壁が不可能な筈なのに彼女はそれを成し遂げてた。
「どうやってバレずに壁を破壊して入れたか先生が教えてあげよう。簡単だこの結界の生成に関わったからだよ」
「ま、まさか…」
「ああそうだ…まず魔力を漏らさず騎士団の背後を取って最低限の魔力放出で気絶させてから入って、そして結界を張っているなら解除の仕方も知ってるな決まっているだろ？」
エルティア絶句
九条理事長満面の笑み
「それって色々と問題浮上しますよ⁉？」
「バレてねぇなら大丈夫だ問題ない、あとで直しておくから大丈夫～」
そのまま何気ない顔で部屋に入って懐から煙草を取り出しすぐに火を付けて窓側に向かって吸い始めている。
此処は王女の部屋なのに堂々と吸われたら困るのだが…
「貴方が来る理由を聞いてませんでしたね…何故此処に？」
「理由？その部下（アホ）を回収しに来た色々危ないんでな。」
「回収？何を言って⁉？」

エルティアは賢王の剣を首元に向けて居たのにその賢王の剣が半分まで消されていたのだ。
何より最後の時の気迫が出ているのだ。
黒く禍々しい気配(オーラ)を放ってその瞳も黒から白に変わっている。
「…なんだ?·人が目覚めたら剣を向けられてるし…最近の挨拶の仕方なのか?·九条?·」
「気にするな警戒してるだけだ。まずお前さんの事を知らない奴だからな」
「理事長先生…アイツ何者?·突然魔力が増えたと思ったら、あんな若さで禍々しい魔力持ってる奴なんている?·」
「…そうだな…今後に知る羽目になるなら今説明しとくか…ほら《G》説明するからお前も会話に入れ」
「ならゴキ○リみたいな省略方法止めろ」

―――――――――――――――――――――

一旦三人は落ち着き椅子を用意する。
気持ちを一時的に落ち着ける為だ。
いきなりあんな事を言われたら混乱するのも無理も無い。
結論としてまとめると
「つまり今の貴方は二重人格であって二重人格では無いの?…我ながら何を言ってるか分からなくなって来た…」
「最初は混乱するだろうな…いきなり二重人格ですってな」
色々と困り果てている二人を置いて、龍牙…ではなく《G》は九条から貰った煙草を吸っている。
「何普通に煙草吸ってるのかしらね?それはリュウガの身体でしょ?やめときなさい…」
「知らんコレは俺の意思だ誰にも覆せないぞ?·エルティア」
「名前にね…ゴキ○リみたいな名前なのに…」
「おいだからそれを言うなと言ってるだろうが‼?·」
九条はギャーギャーと夜遅く言い争う二人をニコニコと笑顔を見せながら眺めている。

「あーもうダメだ…この姫様と会話してるだけで眠たくなる…後は任せた…」
そう言うと抑えても分かる禍々しい魔力は消え去り、龍牙の瞳も白から黒に戻っている。
「あ、逃げた‼?ちょっとリュウガ‼?アイツ呼び戻しなさいよ‼?言いたい事があるのに‼?」
「…すいません…俺から言っても聞こえないフリするんですよねアイツ…」
「なら貴方に聞くわ、二重人格になる前の貴方は何をしてたの?」
「…俺も何も覚えてないんですよね」

龍牙は不思議な事が色々と起きている。
一つは自分は森の中で倒れていて、そこを九条に助けられて救助後色々と介護して事情聴取した結果、記憶が途切れ途切れになっている事が判明した。

二つ目はやっと落ち着いた時に自分の髪型が勝手に変化してたり、見覚えのない人と何気なく会話している事に疑問を生じた龍牙は試しに見張ってて欲しいと言って見張ってた結果
自分が勝手に立ち上がり色々と動き始めていたのであった。
そこを取り押さえて九条とその部下達が龍牙を調べた結果
龍牙は二重人格(デュアルヒューマン)者と言う診断結果が出た。
九条はもう一人の裏の龍牙が生まれしまったと研究員と相談してたら
「俺はもう一人の龍牙では無い俺は俺だ」と言い張るので名前を聞き出そうとしたら
「俺の名か?…俺の名はそう簡単に言うわけには行けない…俺の事をそうだな…グランドと呼べ」
「分かったよ《G》と呼ぶわ」
「何故そんな省略の仕方をしたんだ⊠」

グランドはその省略をやめろと何度も言ったが九条は頑なに直さない為グランド…もとい《G》は諦めたのだ、案外龍牙より押しに弱いかもしれない…

そして3つ目は…

「別々の記憶を持ってるってどう言う事よ？」

「俺に言わないでください姫様…」

そう龍牙と《G》は両者記憶を照らし合わせると明らかに違う点が何点もあるため、両者の記憶を再び聴いても合わない点があるが

唯一両者の記憶が一致したものがあったが…

「何で一致しているところが燃えている部屋で倒れていてしかも別々の視点？」

「…俺に言われても…あとグランドは『俺も知らん』と言ってますよ？」

この二人（正確的には一人の肉体）は適当過ぎる。

あまりにも頼りなさ過ぎる男である、視線を理事長に向けてたら

「……ｚＺＺｚＺＺ」

何処から取り出したのか分からないワインを開けて女性らしく無いボトル飲みをして絶賛爆睡中である。

「…もういいわ…明日学校あるから寝るわ」

「そんな時間ですか…では俺もそろそろ帰りますかね…」

「なら明日の学校よろしくね？」

「ちょっと待って？…何？俺学校行くんですか？」

怠そうな顔でパチパチと瞬きしている。

「当たり前でしょうが…私の執事でしょ？もし私が誘拐されたらどうするのよ？」

『姫様なら殴り倒せるだろ？』

「誰がゴリラだ‼？」

「いや俺が言った訳では無いってその前に難聴どうにしてぁァァぁあ⁉？⁉？」

この後男性の叫び声が城外まで響いたのは言うまでも無い。

ーーーーーーーーーーーーー

護衛勤務1日目

「あの姫様…腹が凄く痛くさっきトイレで腹を見たら真っ赤に染まって…腹痛の治療のため休暇くれません?」

「我慢しろリュウガ、今日は私の着替え途中に堂々と入ってきて…ちゃんとノックしてから入れてとノエルから言われてないのか?」

そう龍牙は朝早く九条を起こして朝飯を作り食わせてからダッシュで城に向かいすぐに執事服に着てノックせずに入ったら。

上下ピンク色の下着を履いてる姫様と目と目が合うと顔を真っ赤になされた瞬間に魔力放出で近づき、龍牙にドロップキックを決めてすぐさま部屋に籠る

そのドロップキックを決められた龍牙は悶絶していて数分は動かなかったのだ。

両者はさっきの事を思い出したのか軽く頬が赤くなっている。

「それよりだ…学園に入ったら気をつけることが沢山あるが、その中で大切な事を教えてやる。」

「何ですか?大切な事って?」

エルティアの顔は真剣な表情になっている為、龍牙も聞こうとする。

「私と同じ金髪の女には気を付けろアレは私の天敵だ」

「姫様の天敵?…何されてたんですか?」

「アイツには色々と困り果てるほど嫌がらせを食らったからなぁ…この王女に対してな…本当は通報とか逮捕して欲しいぐらいだが…私の女王とフィリア家の母親が仲が良いし…何より…」

「何より…それから何です?凄く興味湧くと言うか嫌な予感が凄いんですけど?」

アイツは、と言いかけた時だった。

その横を通り過ぎる一台のリムジン

通り過ぎた瞬間にエルティアの顔色が悪くなっている。
「今時リムジンは乗っている人っているんですね…相当金持ちなんでしょね…って姫様？何ですか急に体調が優れてないですけど？」
「……朝からアレをみるとは今日は不吉な事が起きそうだ。」
そのリムジンは聖焔の校門前に到着すると
リムジンから何人か出てくるとすぐさま聖焔敷地内に入り
登校中の聖焔の生徒を退かしてレットカーペットを敷き
すぐに定位置に着くとリムジンから一人の女性が降りてきた。
容姿はこれもまた姫様と同じ黄金色の髪だが
身長は龍牙よりは大きくないがエルティアよりはある方で何より
「……」
「来たか……あの乳女……」
そうエルティアと彼女の決定的な差はそこだった。
エルティアは無い程では無いが少し小ぶりだが
彼女はドン‼？と効果音が付いてしまうぐらい
中々の大きさなのである。
「……」
リムジンから降りてきた彼女はこちらをチラッと確認すると
何も見なかったようにそのままレットカーペットの上を歩いて学園内に入っていく。
「いや最近の学園等はこんな事するんですか？」
「な訳無いだろ…アイツの指示で動いてるだけさ…執事達も大変だなぁ…」
「……改めて俺は姫様の護衛で良かったと思いましたね」
エルティアは頭の上に???が何個か浮いてるような気がするがそれはスルーする
「てか姫様？時間大丈夫ですかね？」
「ん？お前がスケジュール帳持ってるのではないか？」
「いや？俺は持ってないですけど？」
「……」
龍牙は唯一ノエルさんの手帳に書いて覚えている事があったその

為に腕時計の時間を見た。
現在時刻８時３２分
残り３分後ホームルームが始まる、しかもその担任は九条紗耶である。
正門から下駄箱までの距離で直線で３００ｍである。
そしてエルティアの目線を追うと教室は多分３階だろう。
龍牙は聖焔の学生ではないので遅刻という概念は無いが
エルティアはちゃんとした聖焔の生徒であるのであって
「なぁ姫様」と言った瞬間にはエルティアは既に全力で走っていた。
それはそれは魔力放出で走るほど全力疾走で
「早いな…さて俺はなるべく姫様の教室までゆっくりと行きます…か…ね…？」
スゥースゥーと誰かの優しい鼻息の音がする。
ん？と思いその原音を辿ると
「……すぅ……すぅ……」
木に寄り掛かっている髪の毛が薄いピンク色の子が居た、てか聖焔の服を着て倒れて居たのだった。
まだ４月上旬だが少し肌寒いそして倒れているのを確認するとすぐに龍牙は近づき意識があるか確認等をする。
「おい大丈夫か？…てかなんで正門から数メートルの木のところで寝てるの？」
恐る恐る近づき話しかけるがそれでも一切反応が無いので、身体を揺すってあげる。
「……んぅ？…おはよ……誰？」
「いや寝てたのかよ⁉？体調が悪い訳では無いのかよ…」
「ふぁぁ……じゃおやすみ～」
「いやいや待て待て‼？寝るな！授業行かなくて良いのかよ⁉？」
再び寝ようとしてる彼女をすぐさまにペチペチと頬を軽めに叩く
「ならぁ……おんぶで連れてって」
「なんで俺が…だから寝るなって‼？分かったおんぶするから、ほら行くぞ？」

そのまま中腰になっておんぶの体勢になり、その動きを見た彼女はゆったりと動き龍牙の背中に乗る
「ッ⁉?」
この時龍牙に電撃が走った‼?
彼女をおぶったまではよかったのだがー
おんぶという体勢上仕方ないとはいえ押し付けられた二つの膨らみは
あまりにも柔らかい感触であって、その可能性があるかもしれないが一応恐る恐る聞いてみる。
「な、なぁ失礼な事聞くけどさ?……ちゃんと着けているのか?」
「……忘れた」
「なんで忘れているんだ⁉?女性として大丈夫なのかよ⁉?」
「……時間に間に合わない…けど……レッツゴー」
「チクショウ‼?てか教室何処って寝てるし⁉?」
龍牙は着けていない彼女を背良い数十分の間走り続けたのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

龍牙は色々な生徒や教師に聞きながらやっと彼女の教室まで走り続けたのだ、その走るきっかけと言うか原因はと言うと
「……すっ……すぅ…」
まだ絶賛爆睡中なのである。
龍牙が慣れない執事服を着てその状態で走った為全身軽く汗だくであるのにも関わらず気にせず寝ている。
「…はぁ…なんでまだ寝ているんですかね…」
多分依頼のせいでだろうと言い訳をする龍牙はそのまま何気なく教室の扉を開くと
「「「……」」」
「(うわぁ目線が中々凄いな)」
教室内では九条が資料等で色々と説明をしていたらしい。

その説明している間に入ってしまったそうだ
そして視線の一つにはエルティアが居る。
「…龍牙よ？なんで揺り籠姫（スリープ）を背負っているんだ？」
「スリープ…まさに今の状態から付けられた二つ名だな…」
「いやそいつ年中寝て居るからな？」
「……それ本当なんですかね？九条理事長？」
視線を無視して九条に目線を合わせる。
「そうだよ、そいつは去年からほぼ授業を受けてないが訳あって留年を免除して居る」
「いや免除ってなんですかね…てか降りてくれない？その…揺り籠姫様よ？」
一旦揺り籠姫と呼ばれる子を降ろそうとしようとするが
ギュッと服を掴まれて中々離れようとしないので
何人かの女性生徒達で姫を離れさせようとするが
「離れてくれよ…って掴む力スゲェな⁉？」
そうまるで木にしがみつくコアラのような感覚である。
切り離そうとするが一切離れない
「…これどうします？」
「お前が授業受ければ？」
「いやアウトだろ⁉？俺は姫様の護衛なんだけど？」
その時だった、彼女は瞼をゆっくりと開けて周りを確認して
それから龍牙の顔をマジマジと覗いてる。
顔は中々可愛い顔をしているが眠たそうな表情はまだ健在である。
「なぁ？揺り籠姫って言われてるかもしれないけど…降りてくれません？」
「……リティだよ？」
「……はい???」
「私の名前はアルガード・リティ……」
「あ、今此処で名前説明してくれるのかありがとう」
これで終わりと思った瞬間リティが更に一言
「貴方は私の枕……だから離れない…この匂い気に入った……私のモ

ノ…」

……

「……はい??」

『『ハアアアアアアアアア!?・?・!?・?・!?・?・』』

鐵龍牙と（他の生徒を巻き込んだ）朝一番の爆弾発言であった。

第九話　旗争奪戦

彼女　アルガード・リティはトンデモない事を言いやがった。
かなりの爆弾発言で教室内では騒然となった。
無理も無い、何故ならリティはまず人とはコミュニケーションを取ろうしない。（だって寝ているから）
発言と中々しない者で無口な存在なのである。（だって寝ているから）
学校には来るが何処に行ってしまっている。（寝るポイントを探しに行くから出席していないのである）
コミュニケーションが不可能な彼女は何と言った？
『貴方は私の枕……だから離れない……この匂い気に入った……私のモノ…』
そして生徒の大半はリティから龍牙に目線を変える。
だがその見る目線は各々一気に変わっている。
どのくらい変わっているかと言うと
半分は女性陣の興味深々の目線である、では残り大半はと言うと？
それを示せる人が居た。
「おい？リュウガ？人様が朝から走らされてギリギリの所を登校できたと言うのに何お前はナンパしてるんだ⁉？」
そう黄金の気配を放っていて怒り心頭のエルティアである。
「イヤイヤ待て待て待て‼？ナンパなんてしてませんけど⁉？俺が一緒懸命にこの子を運んで来たんだぞ⁉？」
「この子じゃない……リティ…だよ？」
ウトウトしながら背中で喋っているリティ
「そう言う事じゃ……」
リティは龍牙の耳元で小さく囁く
「（名前言わないと…余計な事……言っちゃうよ？）」
彼女の主権を握っている状態で発揮する軽い脅迫だった。
確かに此処で余計な事を言われた姫様に黄金のグーパンチで殴られる可能性が高くなるから。

「おい龍牙？何私を抜いて喋っているんだ？もう一回聞くぞ？なんでナンパしてるんだ？」
「だからナンパじゃねぇから⁉？…俺は寝てたリティを運んで来ただけだよ、なぁ？リティ？」
「……（こくり）」
「ほらリティだって言ってますし…っ⁉？」
　尚更黄金の気配が強くなった。一体何故だろうか大抵の事を回避したはずなのに一体何故ここまで姫様はキレているのだろうか
「なんでいきなり呼び捨てになる程仲が良くなっているだ⁉？私だってまだ姫様って言われているのに‼？」
「「……」」
　ピタッとあれだけ騒いでいた教室内は静寂に包まれた。
　突如黙り込んだ皆を姫様はキョトンとした顔で見てる。
「いや？なんで急に黙り込むんだ？てかみんな気楽に呼んでも良いんだぞ？」
「？？？」と頭の上に再び浮き出てる姫様だが周りの反応はこれが当たり前である。
　此処は聖焔学園どんな王族でも平民でも焔心（グレイズ）さえあれば此処に入学可能でありそして入学したら地位関係無く平等であるのが聖焔学園のだが
　流石にこの国の姫様に呼び捨てするのは駄目だろう。
「やっと痴話喧嘩は終わったか？」
　この静まり返った教室内で発したのは普通に教室内は禁煙の筈なのにバッチリ煙草を吸っている九条だった。
「まぁ一応終わったような気がすると思う…だよなリティ？」
「……んー……終わった～…」
「後で覚えておけよ龍牙？城内でたっぷりと出して貰うからな？」
　後者はまだ許してくれなさそうである。
「全く…アイツを見習え…冷静で落ち着いているぞ？」
　目線を窓側に向けると水色の髪、すらりとした細身の身体と、端正な顔立ち、冷たい瞳

まるで完璧な美術品のように彼はこちらを見つめていた。
「どうした？橘？リュウガの事を見つめて？」
「いえ…特にはなんでもないですよ姫様」
「お前もまだ姫様と言うのか‼？」
ぷんぷんに怒っている姫様である。
それでも橘と言う彼はそれをスルーしてやはりこちらを見ている。
なんか見られていると怖いので少し話かける。
「…あのー？俺になんかようですかね？」
「…私の事を覚えてないのか？」
真剣な眼差しで見られるが龍牙にはこれしか言う事か無い。
「俺は初めて会いましたね何処かで会いましたか？」
更に彼の瞳はゴミを見るような瞳でこちらを見ていると
彼から紺色の気配（オーラ）が浮き出ると、一瞬腕が動いて見えた瞬間にゴキン‼？と俺の首元に紺色の雫銅と背中で寝ていたリティが瞬時に張った桃色の魔力防壁がぶつかり合って響いている。
しかも僅か5㎜の所で張られている為龍牙の魔力防壁であったら簡単に貫かれて最悪死んでいただろう。
これに反応しているリティは中々の強者かもしれない。
それを呆然として見ている姫様とその生徒達。
「何……枕に……八つ当たり…してるの？……」
リティからは結構な桃色の気配が噴き出ている。
弾かれた雫銅を手元に戻し消えている。多分アレが彼の焔心だろう。
「簡単だそいつには因縁がある…だからボケている奴を潰すためにやっただけだが？」
「待てよ？俺は本当に彼の事は覚えてないんだが九条理事長？彼は誰ですかね？」
説明を問おうとしたら既に何本かの吸い殻を燃やして外に捨てている為全く関わろうとしない。
今日で何本目か分からないタバコを再び吸っている
「あーのー聞いてますかね？彼はだれです？」

やれやれと思い煙草をふかしてやっと質問に答える。
「アイツは橘一誠(いっせい)あの有名な橘家だよ」
「…有名なんですか？」
キョトンとして九条の方を見ると九条は呆れた顔で見ている。
「橘家はな…あらゆる技術を習得している本当に些細な事でも極めてる家系なんだよ
そしてだ、彼はな最も難しいと言われた武術を極めてしまった。
大の大人を複数相手しても倒してしまうぐらいにな。」
彼はそれでもこちらに向ける殺意…いやなんだろうこの感覚
なんとも言えない感情が溢れている。
「で？なんで俺が攻撃されている理由と繋がるんですかね？」
「多分なお前の家のせいだな…鐵家と橘家はな色々と問題があったんだよ…その結果橘家は一時的に家に汚名が塗りつけられたらしい…」
「何してるんだ…俺の家…いや見覚えない以前にも記憶無いんだけど…」
「おい待て記憶が無いってなんだ貴様」
その発言によって橘に色々と説明をし始めた。
流石に二重人格の事は除いては大抵の事は言った
「一部の記憶の損失だと？つまり私の事を本当に覚えてないのだな？」
「あぁ…一切覚えてない」
「……そう……なのか…何も覚えてないのか…」
気配が少しづつ消えていく少しは落ち着いたのだろう。
何も覚えてない相手にいきなり即死級の不意打ちをしてる為
少しは反省しているのだろう。
教室内の温度も少しは下がったー
「なんで私が空気になっているんだ‼？」
訂正一人だけまだ熱を持ってる姫様がいた。
「もー別に気にしなくて良いじゃないですかー姫様～」
「そうですよ次の授業の模擬戦があるんであまり気を張っていると疲れますよ？」

「……そうだな…それもそうだあの乳女を倒すためにも色々と準備しないとな、すまんなティファ、レウ」

一人は茶髪のポニーテールの子はティファと言うらしい

姫様と同じぐらいの背丈はあり明るそうな子である。

もう片方の黒髪のショートヘアの子はレウと言うらしい

見た目は冷静沈着な子だろうと思ったのが第一印象である。

二人は姫様を宥めるとこちらに向かって来てまだ背中で寝ているリティをなんとか食べ物で釣って退ける事は出来た。

リティは軽い方の為楽だが流石に長時間背負っていると肩が凝ってしまうものである。

「大丈夫すか?……えーと…」

「リュウガさんですよティファ…本当すぐに覚えないんですね」

「すぐに覚えられる記憶力を持ってるレウが凄いだけだよ‼?」

「…仲が良いんだな…お二人さん」

「レウとはまぁ長い付き合いだからね〜」

「確かに長い付き合いですねティファとは」

クスクスと二人で喋っている為思っていた以上に仲が良いらしい。

そして学園内でチャイムが鳴り響く

「良し一時間目は終わりだ、二時限目の模擬戦の集合場所はグランドだ、遅れないように来いよ〜」

呑気に煙草を吸い終えた九条は怠そうに教室から出て行く。

俺もその後を追うように教室から出ようとするが

ガシッと肩を掴まれて恐る恐る背後を見ると

満面の笑みを浮かべている姫様が居た。

「おい逃げるなよ?リュウガ?取り敢えずだ、時間がないから６分で事情説明してもらう…出来なかったら殴り飛ばす良いな?」

このトンデモ理不尽の極みの姫様に抵抗は出来ないの悟った龍牙は本気で６分で説明をしたそうなのである。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

なんとか説明を終えて許しを得た龍牙。
そしてそのまま龍牙達は少し学園から離れた山の中にある運動場に移動する。
特に移動中はリティが再び俺の背中に乗ったり一誠がまだ此方を見ている事と姫様がキレているところをティファとレウが抑えてくれてた。
まさか移動するだけで精神を擦り削られるとは思わなかった(特にリティが背中に乗っている時)
山の中に入ると結構足元が悪いのかと思えたがそこはちゃんと整えられて歩きやすいようになっていた。
急に道が広くなると思ったら目の前には聖焔学園とまでは行かないが大きな校舎が建って居た。
「姫様これなんですかね?」
「此処は聖焔学園模擬戦場だよ…わざわざ建設系や地形系の魔術師を呼んで作ってもらったらしい…私も二年生だが建設した理由は知らん」
少し機嫌が悪いがなんとか説明してもらった。
「本当憂鬱だな…もう見たくない奴が居るしな…」
ん?と思い視線を正面に向けるとそうあのリムジンの金髪の子が立っていた。
「あら遅いわねお姫様?いつもなら先に居るはずなのに」
「こちらだって色々と事情はあるんだよ乳女」
「あらそうなの?それは大変ねチビっ子姫?」
既に目だけで火花が散っているしお互いに殺意が高過ぎる
「あのー…姫様?時間大丈夫ですかね?…俺と姫様とリティ以外は先に運動場行きましたけど…」
「マジか」
「…あらもうこんな時間なのね…ではお先に〜」
タタッと先に入っていく金髪の子
「…今日は絶対に勝つ……今日は私は運が良いな…フフ…」

「顔怖いですけど…あと俺嫌な予感がするんですけど…」
　不適な笑みを浮かべている姫様とその笑みを見て寒気を感じる龍牙達は姫様はそのまま運動場に入り、龍牙とリティは観客席に移動する。
「ってなんか連れて来ちゃったけどリティは参加しないの？」
「……危ない……から…参加しない……」
「危ない？…いやだって一応訓練だから加減はあるだろ？」
　いつの間にか降りて横に座っているリティは首を横に振るう
「だって……あのお姫様……と粛清淑女（シャルハラ）は…本気で……戦う…」
　ゆったりと話しているがその言葉には少し重みがある。
　多分リティは何度も見た事があるからこう言っているのだろう。
「淑女ねぇ…色々と危なそうだな…」
「まぁ今日は中々血の気は凄いなアイツらはな」
　背後から観客席に来たは煙草の代わりにキャンディケインを咥えて舐めてる九条だった。
「……どうも～……理事長～」
「よう久々だな揺り籠姫（スリープ）あとお前の兄は結構心配と同時に喜んでたぞ？」
「お兄ちゃん……心配症……気にしなくても良いのに……」
　ムスッとしてるリティとやれやれと思っている九条
「てか理事長？貴女自分の仕事は？」
「印鑑系の実務は秘書に任せたから良い」
　何気にサボり発言である。
「そんな事よりな…エルティア姫とリリース嬢が本気でやるらしいから来た。」
（相手側の金髪の子はリリースと言うのか）
　確かに両者の気迫が中々凄いものである。
　すると両者の組の間に水晶玉が地面から出てくる。
「アレは何ですか？理事長」
「アレはな空間制御装置だ、流石にあんな狭い所まで全クラスで闘うのは無理だからな…軽く生成する」

は？と言いかけた瞬間に途端全体が光に包まれてる

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

暫く眩しくて目が開かないが、少し落ち着いてくると再び眼を開けると街が広がって居た。

決して古びた建物ではないが立派な建物がそびえ立っていて

整備された石畳の大通りにポツンと龍牙は立って居た。

「……何処だよ…ここ…」

現状確認してる間に突如爆発音は響く

「ッ⁉？」

音のした方向に向かって走って行くと

エルティア達と他のクラスの生徒達が己の焔心を展開して闘っているのである。

「ハァァァ!!!!」

エルティアの焔心《賢王の剣（ローグスタンス）》の大剣の風圧で

何人かの同級生を薙ぎ払う

その隙にティファは接近して風圧で飛ばされる相手に腹蹴り、溝打ちを与えてトドメを刺す

それから倒された相手がすぐに消える。

「…いや何が起きてる…」

「何が起きてるって？旗争奪戦（フラッグ）だよ龍牙」

取り敢えず振り返ると欠伸をしてる九条と携帯用のお菓子を食べてるリティが一緒に居た。

「旗争奪戦？…いやその前にここ何処だ⁉？」

「ここはあの水晶玉で発動した固有結界内だ…あと旗争奪戦の説明もしとく…簡単だよ旗を持っている奴を護衛しながら相手の旗を奪うのがルールで勝利条件は

一つ目が旗を奪う事これは当たり前だよな

二つ目は旗以外の護衛を全員倒す、これは難しい

焔心の使用は許可申請済み、あとこの町内にもゴム製の武器がある

からそれも使って倒して尋問もあり…まぁそれを使う人なんてあんま居ないけどな
　制限時間は1時間だな…」
「なるほど…で?俺らは今どう言う状況なんだ?」
「簡単に言えばコインの裏側と言うべきだな…姫様達は表側に居て戦ってる…私達は裏側から見てると言う感覚だな」
「絶対分からない感覚だな」
「理解されないのは知ってるそれを嫌ってる人もいるしな…」
　その後だった正面から更に爆破音がすると
　体長二メートル超の鎧を着た騎士がエルティア達の目の前で立って居た。

ーーーーーーーーーーーーーー

　その爆破直後には既に私、エルティア・オルフェンは動いてた。
反射的に前に投げ出した身を賢王（ローグスタンス）の剣で地面に突き刺し、そのまま遠心力で側転して回避
　直後、今まさにエルティア達が立っていた場所に戦斧（ハルバート）の刃が降り落ち、轟音と共にこの場の静寂を打ち砕く
「やっぱり来たか乳女の焔心‼?明らかに私だけに殺意高過ぎるだろ‼?」
　着地後すぐさま体勢を整えると魔力放出で懐まで接近すると
　そのまま身体を捻り反転、甲冑の騎士に胴薙ぎの一閃を放つ。
「ーーーーーーーーーーー」
　戦斧を打ち下ろした甲冑の騎士はそれに反応せずに胴薙ぎを直撃
　それでも吹き飛ぶまでは行かないだろうと思いすぐさま戦斧を抜こうとするがエルティアの魔力放出によっての胴薙ぎの一閃は一撃で壁を貫く程吹き飛ぶ。
　甲冑の騎士はすぐさま立ち上がろうとしたがそれが仇となった。
「これでも食らって倒れてくださいい‼?」

ティファの両拳に付けてるグローブ状の焔心(グレイズ)《マッハリーグ》がそのまま甲冑の騎士の顔面に直撃すると尚更壁練り込んで行く。
二人の強力な打撃を食らった騎士は動かなくなるとすぐに消滅してしまった。
「…本当あの乳女の焔心はウザいな…戦力が減らさせる一方だな」
「姫様～大丈夫ですか～？」
「私は大丈夫だぞ、ティファお前は大丈夫か？」
「魔力(マナ)の消費がエグいぐらいは大丈夫ですよ～」
少しフラフラとしてるがティファは軽く魔力切れになっているからである。
ティファの焔心の能力は速度加速である。
物であり自分の筋力で運べるものなら一緒に加速して移動する事が可能
先程、甲冑の騎士を殴り倒した技は焔眼(スターバニッシュ)
その加速を使いその加速で殴り潰すと言ったシンプルな技であるが
中々の魔力消費なのである。
「だから鍛えとけって言ってるだろ？…去年から言ってるじゃないか」
「いや～これでも中々鍛えてると思うんですよ～去年だって2・3回使ったら気絶してましたしね…姫様見たく魔力量そんなにいっぱいある訳無いですから。」
「それ貶しているのか褒めてるのか分からない」
『お二人共大丈夫ですか？』
「あぁ…一応大丈夫だが…いきなり話しかけてるのは怖いからやめてくれレウ」
「そうだよレウ!!?・まだ慣れてないんだから……はー怖かったよ…」
普通に会話しているがこれはレウの焔眼の効果である
レウの焔心は弓使いつまり弓兵(アーチャー)である。
効果は範囲内の敵を目視可能の能力であるが
レウの焔眼(インフェルアーツ)《森林の狩人(インビシブル・ハンター)》を発動する事よって範囲内に味方と

認識していれば意思疎通が可能である。
　ただこの焔眼発動中は矢が打てないというデメリットがあるが
「レウ？お前は大丈夫か？」
『大丈夫です一誠様がこちらに気付いた相手、気付かない相手を倒してもらっていますので』
　この土地の中央の時計塔に滞在しているレウはチラッと背後を見ると何人か倒れている他クラスの生徒がいるのに対して全て対処終えて真ん中に立っている橘一誠を見ている。
「お見事ですね一誠様」
「いえ…単なる準備運動みたいなものなので、そのまま焔眼を発動し続けてください…私は粛清淑女（シャルハラ）の焔眼をなるべく落としてくるので…」
　そう言って直ぐに屋根から降りて迎撃は向かった。
『今現在一誠様が残りの《女王の兵隊（クイーンオブナイト）》の相手に向かいました』
「おいそれだとレウを護衛する奴居ないじゃないか‼？今そちらに向かうぞ」
　直ぐにクルッと時計塔の方に向かおうとするが
『いえそれは遠慮してください』
　普通にレウに援護拒否された。
「なんでだ⁉？」
『一誠様が他のグループのメンバーを呼んでくれてこちらは大丈夫ですが…今2時方向に集団出来てる相手が居るので』
　言われた通りにそちらに体制を向けると、さっき倒れてた騎士と同等の者が何体も居た。
「……わざわざ来たか…乳女‼？」
　その騎士の背後に椅子に座って移動している者が居た。
　彼女は隣に居る彼女の執事からメガホンを受け取る。
「私の名前はリーリスいう名があるのよ？本当しぶとく生きてるのね？エルティア姫？」
「お前の焔眼が厄介過ぎてイラついているところだ」
「そんなに苦戦してるのね～でも前回よりは2体ぐらいは減ってるけ

ど…まだ３２体居るけど？」
「…チッ…（レウ私達のクラスは何人残っている？）」
『現在３９人中１５人のみですね…こちらに残り７人でこちらに３人居ます…多分ですが…』
「（そうだ、あの乳女を含めて４人居る）」
　既に直線上に目視できるが彼等の前にあの甲冑の騎士が各々の武器を構えている。
「（他の相手とかで手がいっぱいなんだろ？…後はこちらで撹乱して逃げろ、後１０分間生き残れば勝てる。）」
『勝機はッ…あるです…か？』
　こう通信しながら逃げているレウにエルティアは冷静に伝えた。
「（あるから逃げろ…なるべく離れろよ？）」
　そのまま一方的に通信を切られたという事はやっと逃げる準備して逃走してるのだろう。
「さぁて…人様が通信中に攻撃しない時点で結構舐めてるだろ？」
　大剣を振り上げるとその勢いで地面に突き刺すと、その瞬間に一直線に亀裂が入って行くと建物を巻き込んで崩壊していく
「流石ねゴリラね！…とんでもないパワーだわ‼？」
「やかましいわ‼？行くぞティファ‼？」
　エルティアはそのまま亀裂を追うように走って行き
　ティファは焔眼を発動させて一気に壁を足場にして横走りして突っ込む
「あのチビを優先的に止めて歩兵（ポーン）、騎兵（ルーク）」
「「ーーーーーーー」」
　二騎の騎士は主人の命令に従いそのままエルティアに向かってくる為
　ティファの事は命令外なので無視して行く
　ティファはその動きの隙を逃がさない、既に彼女（リリース）と同じクラスの生徒は溝内等で動けなくした。
　なら後はなるべく戦闘せずに旗を奪うのみ‼？
「行くよぉ～～《スターバニッシュⅡ》‼？」

さらなる加速に背後からの奇襲
既に音速までとは行かないが確実に肉眼で追う事は不能であるスピードまで行っている為５０メートルの距離など一瞬縮まる
「(旗は貰いましたよ‼?)」
そのまま後頭部を殴ろうとした瞬間にゴキン‼?‼?と眼で見えない壁が張っていた。
「(嘘ぉ⁉?あの人、焔眼使いながら自分の周りに魔力障壁を張ってるの⁉?)」
しかもティファは焔眼を発動した状態で障壁を殴って弾かれた
この事実の時点でティファではあの障壁の破壊は不可能となった。
「(早くここから離れ⁉?)」
思考は中断された理由としては他の甲冑の騎士４体が既に己の武器をティファに向けて「降伏しろと」言う感じである。
「……はぁ…すいません姫様…お先に失礼しまーす。」
自らの降伏としての証の白旗を懐から出そうとしたその時だった。
「……」
突然一騎の甲冑の騎士が音も無く真横に半分に斬られてしまったのだ。
「……アレ?姫様の斬撃が飛んできたのかな?」
突然半分に斬られて騎士を見て他の騎士は警戒をするが
金属と金属が擦れ合う音すらせずに残り三騎は切り裂かれてしまった。
「…何事?…てか姫様が本気でやらないと斬れなかった相手を斬るとか…私のクラスに居たかな?」
そう考えいる時にチョンチョンと背中を突かれる。
「誰⁉?…って?アレ?なんでいるの?貴方?」
「……なんで居るってそりやぁ……圧倒的に私情に巻き込まれた者ですよ俺は」
そう確実に関係の無い鐵龍牙(イレギュラー)がこの場に立って居るのだから。

第十話　騎士と執事

彼女は唖然としてた、あの騎士もどきを一瞬で蹴散らせた彼は確か教室内で揺り籠姫（スリープ）を運んで来た人。
「あの…クロガネさんですよね？ありがとうございます…」
「……」
ティファの言葉に龍牙は反応を見せない。
無視されていると最初は思ったがそれは違った。
気づいて貰おうと龍牙の真っ正面に行こうとした瞬間にティファは彼の顔を見て驚いた。
ただ奥で闘っている姫様を黒い瞳に納めて見つめている、教室内でアタフタしていた彼とは別人に見える。
「（この人聞いていないじゃなくて単純に集中し過ぎて私の声が聞こえてない）」
その鬼のような眼光はフッと力を抜くと
「あれ？…なんか話しかけましたか？」
さっきの教室内の彼に戻っていた
「うん少しお礼をしただけだよ。それよりも…なんで姫様の執事さんが参加してるの？」
質問をされたは龍牙はなんとも渋い顔になっていた。
「簡単に言うなら…増援みたいなものですよ…」
「そう言えば姫様が秘密兵器があるとかなんとか言ってましたけど…まさか…貴方ですか？」
「……あの話本当なのかよ…」
ティファの発言を聞いたらガックリとしている。
「理由は分かりませんが…ドンマイですね…」
こんな危険的な状況から抜け出してホッとしている瞬間にこちらに向かって姫様が飛んで来ると思った時には真横を通り過ぎて建物に衝突してようやく止まる。
「姫様⁉？」
ティファがすぐさまエルティアのところに向かおうとしたら

「邪魔過ぎるわ!!!!!!」
そのまま瓦礫を蹴飛ばして立ち上がる。
瓦礫を飛ばした後にブォォン!!?と賢王の剣を槍投げのように投げ飛ばすと、龍牙の頭上を通り過ぎて歩兵(ポーン)の頭に直接突き刺さりそのまま建物を崩しながら背後に倒れる。
「ふぅ……痛いな…普通一国の姫様を投げ飛ばすか?…此処なら地位も関係無いけど…」
スタスタと立ち上がりこちらに向かって来る間にペッと口に含んでいる赤い液体を吐き出す。
「大丈夫ですか?姫様?」
「おい!!?まずなんで私を最初に助けずティファを優先に助けているんだお前は!!?」
「いきなり文句なら元気そうですね…いや姫様ならなんとかなるかなーって…信頼してたんですよ?」
「で?実際のところは?」
「姫様ならあんな奴殴り潰せると思いか弱い彼女を優先的に助け」
「フン!!?!!?」
そのまま顔面に向けて素早い右ストレートを放つエルティアと
「ブフェラ!?!?」
それを避けれずに綺麗に殴り飛ぶ龍牙、なんとも元気なお二人である。
そうしてる間にも騎兵(ルーク)はエルティアの方に向かってくるのに対して
「…龍牙頼んだぞ?私は疲れた…」
ふぅと言いながら瓦礫に座り込んでしまう。
「ーーーーーーーーーーーー」
騎兵は好機と思い、大振りに腕を振るいエルティアに向けて攻撃ーー
「奪い尽くせ魔力絶縁(ヴラド)」
その攻撃が当たるはずの腕は焔眼(インフェルアーツ)魔力絶縁(ヴラド)によって全て奪われる。

「ーーーーーーー」
騎兵の顔は見えないがもし人間のように感情があるのなら彼は困惑しているのだろう
彼の焔心は木刀の筈なのに斬られたよりも吸い尽くされた感覚を味わっているがそんな事を思っている間に騎兵の身体は既に半分まで吸い取られていた。
騎兵は最後に己を身体を吸い尽くしている者を見ようとした瞬間には
クルクルと視界が回っていて、それは首を斬られたという事を認識された後であった。
「…お見事だなリュウガよ称賛を与えよう」
パチパチと拍手をされるが龍牙が反応せず次の目標を見つめて居た。
まだ他の四騎の騎士に守られている女性を見ていた。
彼女は困惑している顔であるがその眼にはまだ闘志を宿っている。
ボソボソと喋っているが何を言ってるか分からないがそれは行動で示してくれた。
彼女の前に居た二騎がすぐさまこちらに向かって走ってくる。
アレは彼女の焔眼によって作られた騎士なんだろうが彼らに意思など関係無い
ただ己の主人の命令に従うだけの可哀想な存在なんだろう。
龍牙は例え人間では無い者にもそういう思いを持ってしまう事があるが
「でも攻撃してくる相手には…俺は容赦はしない」
龍牙は走りながら抜刀の準備をしていた。
速度は相手の方が早い。だがそんな事は関係無い、龍牙は鞘のある木刀《月印》を持った。
「「ーーーーーーー!!?!!?」」
二騎は雄叫びとは程遠い叫び声を発して左右からの戦斧(ハルバート)の攻撃、例えこの攻撃が当たらなくとも彼等の背後いる同等の騎士が倒してくれると願い、二騎は振り下ろーーーーーーー

「吸血絶縁（ディープヴラド）」
と発した後には二騎を通り過ぎている時には抜刀を終えていた。
そして四騎を含めてリーリスの騎士が全て消失した。
「ッ⁉？」
リーリスは更なる理解出来ない風景を実感するよりも彼の姿が消えている事に気付いた
「（あの執事は何処言ったの⁉？）」
「…はいこれで王手」
彼は私の首元に木刀を置いて背後に立ってた。
「……降参と言わせてたいのかしら？」
「…まぁな…此処では傷は無かった事になると聞いたけど…それでも俺は気は引けるな…」
「…優しいのかしら？貴方…なら質問して良いかしら？」
「降伏の後なら良いけど？」
はぁ…とため息をつき、リーリスは「降参よ」と呟くと
そのまま固有空間は消えるように無くなった。
旗争奪戦（フラッグ）は鐵龍牙（イレギュラー）の参加によって幕を閉じるのであった。

第十一話　生徒になりました

　そのまま旗争奪戦（フラッグ）は幕を閉じ、中世期の街並みは跡残らず消えさっきいた運動場に戻ってきた。
「良くやったなリュウガよ褒めてつかわす」
「はいはいそれはどうも…」
「なんだ？疲れているのか？見た目はそんなに疲れてなさそうだが…」
「いやぁ？目の前の相手をどう説得するか考えています。」
「誰のことを言っているんだ？」
　アレですよと龍牙が指差す方向にはとても不機嫌な顔をしている粛清淑女（シャルハラ）がこちらに向かって来た。
「早く説明しないさい‼？なんで貴方が旗争奪戦（フラッグ）に出てるのかしら⁉？そして何⁉？あの滅茶苦茶な焔眼（インフェルアーツ）は⁉？それから」
「少し落ち着いてくれ…興奮し過ぎだろ」
「そこは私が説明しよう。乳女」
　会話に割り込んで来たのがエルティアだった。
「そうよ貴女の従者でしょ‼？貴女が命令で何かしたのかしら？」
「なぁ？あの固有空間に入るには色々と条件があるのは知ってるだろ？」
「えぇ…まず一つが生徒である事、二つは空間外からの武器の持ち込みは禁止ぐらい…」
「まだ分からないのか？…簡単だよ」
　ビシッと龍牙に向けて指を指し一言
「こいつ生徒にしたんだよ」

……

『『えええええええ⁉？⁉？⁉？⁉』』
　本日二度目の爆弾発言である。
「おい龍牙自己紹介しろ」
「この状況で⁉？…いやそれは…分かった俺の脛を蹴るな地味に痛い

から…では改めて……どうも臨時生徒になった鐵龍牙です仕事は探偵屋、お願いします」
「探偵屋という何でも屋さんな、みんな何かしら依頼しろよ～取り敢えずやってくれる筈だから」
　その発言によって歓声と興味の湧いた目線を感じる（７割女性である）
「うわぁ…怠い事してくれましたね……姫様」
「何丁寧に自己紹介してるのよ⁉？」
　そこに少しだけ空気になったリーリス叫ぶ
「なんだ？乳女？別に本当にお前の事を忘れていた訳では無いぞ？」
「いや本当で忘れていたわね貴女！…いやそれより入学させたって…試験とかはどうしたのよ⁉？彼と戦って分かったけど魔力量が平均の半分以下じゃない…どうやって？」
　相当な手続きをしたから入学出来たと思ってーー
「そこはな…聖都の姫の権利でなんとかした‼？」
　前言撤回権力を使ってゴリ押しでなんとかしてた。
「いや…それ以前に彼はここの入学を志望してるの？」
　チラッと此方を見てくる、エルティアも「さっさと答えろ」と言う目付きで見てくる。
「別に俺は構いませんよ？…入学拒否したとしても現時点で抵抗は無理そうなんで…従うしか無いですから雇い主の命令は絶対なのでね…」
「そう言って悲しみの目で見るのやめてくれないか？」
「いや実際かなりエグい事してるわよ…」
　コホンと咳をして気を取り直しする。
「なんか話逸れてるような気がするけど…次よ何？あの焔眼ー」
「あ、それは返答出来ませんね」
「即答⁉？どうしてよ‼？そのぐらい教えてもいいじゃないの」
「あ、俺呼び出されているんで…」
「は？誰って走るのはや」
　すぐさま運動場から走って去っていく。

「……まぁいいわ…ねぇちびっ子彼は一体何者かしら？」
「ちびっ子言うな乳女…アイツか？ノエルが勝手に雇ったらしい…詳しい事は分からん」
「（雇ってすぐさまこの姫様の執事ねぇ…色々と訳がありそう…）」
「なんだ急に黙り込んで…なんだ？アイツを雇う気かそれは無理だぞ今は私の執事だからな」
「別に執事なんて全然雇えるから良いわ…まぁいつか依頼しようかしらね～」
そして学園のチャイムが鳴ると両生徒は再び聖焔学園に戻っていくのであった。

第十二話　生徒会長

龍牙はそのまま運動場から離れ聖焔学園に戻りまず向かったのはトイレだった。
別に会話している間にお腹が痛かった訳でない。
会話しているのも怠いから抜け出した訳……それは軽く合ってるかもしれない。
なら理由ならと言うと単に色々な目線の感情があり居心地が悪かったのである。
「いや…あの人（リーリス）に勝つ為に俺を生徒にさせるとか本当奇想天外だな…」
『確かになァ…本当権力を全力で使ッたようだなァ』
「そうだね…あとありがとな…《G》少し制限を解除してくれて」
『ベツに構わん…それよりアレは一日一回限りだからなァ？…覚えとけよ？』
「そんな事は分かってるよ…本当意識が飛びそうになるよ…」
ははとから笑いしているがトイレ内では龍牙一人しか居ない。
現在龍牙は《G》に右眼を貸している状況である。
右眼を貸すことにより《G》も外の様子が見てるのである。後付け足すなら《G》本人が退屈だとうるさいので色々な結果こうなって落ち着いている。
『本当あの焔眼を知りたがってるあの…乳のデケェ女…色々と良さそうだなぁ…』
「…勝手に手を出すなよ？お前…あの状態だと抵抗は出来ないからな…」
『ワかってる…でだ…本当よかったヨなぁ…あの焔眼（インフェルアーツ）はただの焔眼じゃネぇのによ…」
「……その点に関しては色々と勘違いして良かったと思う」
ギャハハと脳内で笑う《G》軽くうるさいが龍牙は何も出来ない為我慢する
「…全く…で？お前トイレに行けって誘導したけどなんだ？別にあの

場で話しても良かっただろ？」
『お前と喋って居たら俺の事を認識してた奴が増える可能性あった。』
「ふーん……おい何気にかなり重要な事を言ったなお前」
『なぁに気にスンな…まだバレてねぇよ…』
「そうか…で？見てた奴は誰だ？」
　早く言えと急かそうとするが
『教えネぇよ…教えて欲しかッたら交代時間を増やせソレが教えル条件だな』
「それならこちらから願い下げだ」
　こいつに身体を貸したらロクでもない事は既に何度も経験済みである。
　色々と怠くなった為さっさと姫様達のところに戻ろうとするが
『なぁ龍牙…良いのか？生徒になってよ』
「なんだよ…生徒なんて今日一日だけだろ？」
『……はぁ……』
「おいその哀れな奴で見てくるそうな感じ色々と気味が悪いぞ」
『多分あの姫様ガチでお前を入学させたぞ？』
「な訳無いだろ？…俺は今年で二十歳だぞ流石に入学なんて…」

ーーーーーートイレ出てから二時間後ーーーーーー

「ーーーーーーという事だ校則は守れ…って聞いてたか龍牙？」
「（どうしてこうなった⁉？）」
　現在龍牙は理事長室で説明を受けていた。
　あの後トイレ出た途端堅いの良い男二人に両腕を掴まれてすぐさま運ばれた所が聖焔学園の体育館での転入生紹介をされ
　その後自己紹介等をされて終えたと思った矢先に姫様（エルティア）が馴れ馴れしくこちらに話しかけた途端一斉に殺意（主に男性陣から）の目線が突き刺さりお腹がキリキリと痛くなった途端に横からリリースが乱入してきて龍牙を目視すると明らかにさっきの試合での問いは諦め

て無さそうであり、リーリスの背後にはもうそれはファンクラブ見たいな集団が集まっていた（しかも其方からも殺意）
そこにいつの間に背後にリティが背中に乗り掛かりそのまま睡眠（しかもまだ付けていない状態からの抱き枕のように抱き締めてくる）
その結果女性陣からは歓声が男性陣からはブーイングと初日から色々な方面からヘイトを稼いでしまった。
そしてだ、またトイレから出てきて龍牙を運んだ男達が再び龍牙を拘束、そして見覚えのある理事長室に運ばれて色々と理事長直々に説明を受けさせられた。
それが今現在に至るまで起きた出来事である。
「一つ質問して良いですか？」
「あん？質問か？良いだろう聞いてやる」
「俺ってマジで入学ですか？」
「あぁそうだお姫様の推薦でのマジの入学だおめでとう!!!!」
「なんか嬉しそうですね!!？てか俺もう二十歳になるんですけど!!？教師はともかく生徒ってなんですか!!？」
「だってお姫様が真面目に言ってくるもんだからさぁ…あとは察して？」
「それを真に受けちゃダメでしょ…てか良く俺の入学許可を作りしましたね…」
軽く怠そうに言うと九条はまた煙草に火を付けて吸い始める
「私のゴリ押しと姫様の更なるゴリ押しの結果だからな」
「……」
『もうアレだな…なんでこいつを理事長したのか当時の奴らと話をして見たいものだナ』
本当ロクでもないなこの理事長
「質問が終えたら…次は生徒会室に行ってこい生徒会長が個人的に話をしたいってさ」
「いや…流石に俺姫様のところに戻らないと…行けないような気が…」

「運んで行け」
パチンと指パッチンを行うとバン‼?と扉が開くとそこにはあの大柄の男二人が入ってきた
「またお前らかよ⁉?てか本当誰だお前ら‼?」
「あの二人は最上兄弟だよ…学園の中で一番の大柄な生徒だ、ちなみ双子で17歳だ」
「嘘だろ⁉?てっきり職員だと思ったら生徒なのかよ‼?いやだからなんか話してくれない⁉?無言で来るの怖いからァァァァァァ⁉?⁉?……ぐえ……」
たとえ魔力絶縁（ヴラド）という魔力を奪い取る能力があったとしても流石に生身の身体でしかも鍛えている者の前には無力である為、そのまま再び無言で迫って来る巨人に叫ぶ前に首を絞められ二人ががりで運ばれる龍牙であった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

そのまま軽く意識が朦朧としてる間に移動させられ扉の前まで着くと一旦降ろされて如何にも「さっさと入れ」と言わんばかりに最上兄弟の圧が凄い
「……本当なんか一言でも喋ってくれよ…」
一応トントンとノックするが反応が無い為少し疑問に思い扉を開ける
とそこはもう一言で言うなら「俺が入ったら駄目だろ」とぐらいの綺麗な部屋に真正面には椅子に座った薄紫色の頭髪モデルが座っていた。
スタイルも良し、顔も良しと言った人生勝ち組に近いモテる要素を全て持っている。
「……アンタが生徒会長で良いのか?」
もう運ばれている時点で早く帰りたいのにも関わらず、更に目の前に優雅に座ってこちらを見てるイケメン会長が居る為胃に穴が空きそうである。

そして彼は無言で立ち上がり此方に歩いてくる。
この時点で龍牙が勘で嫌な予感がした。
そしてまず彼が発した言葉はーーーー
「……可愛いわね貴方」
「……は？」
「いやぁー新しい男性の学生が入学したからって興味が湧いてたのよ～そしたら…まぁ見たら若いしピチピチの子じゃない～本当私嬉しいわぁ…」
そう言って身体をクネクネと動かす、気味が悪いと思ったが…よく見ると地味に顔には化粧をしたり、微かに女性物の香水の匂いするし、爪にはマニキュアを塗っている。
この要素を見て龍牙と《G》は結論を出し同時に思った。
「『（生徒会長…オネェなのかよ⁉？）』」

第一三話　問題の解決とは？

もうこの会長の存在(キャラ)が濃すぎる…だからあの最上兄弟、移動させられてる時一瞬哀しい目で見て来たのはこういう事なのか……と今知りたく無い事を知ってしまった。

そう思っている間も会長は身体を止めないでクネクネと動いてた見続けたらてたら気持ち悪くなってきた。

「で？あの…生徒会長さん？」

「あら会長さんなんて言わなくていいわよ♡アリスって呼んで良いわよ？」

「しかもオネェになるのが分かるのを見過ごしての名前かよ」

「男にすぐ嘘をつくなグリス」

この部屋には俺と会長(オネェ)しか居ないのにも関わらず何処かしら声が聞こえたと思ったら入ってきた扉方面から聞き覚えのある声の主が出てくるそうエルティアだった。

「もぅ…良いじゃないのそのぐらい……全くこんな可愛らしくてカッコいい子を執事にするなんて羨ましいわティアちゃん♡」

「一応私の執事になる事を認めただけだ、執事にさせたのはノエルだ」

「あらノエルちゃんが？ほぉ…やっぱり見る目あるわねノエルちゃん」

「あのー…で？俺は何故呼ばれたのですかね？」

軽く二人の会話ばっかで空気になりかけた龍牙が軽く怠そうに一旦会話を区切らせる

「あぁそうね…呼んだ理由としてはまずこれ」

すぐに内側のポケットから一枚のカードを渡させる。

「これって学生証だよな？」

「そうよ今日からうちの学園の生徒でしょ？理事長先生に渡してもらうところを私に替えてもらったのよ♡新入生が男でしかもいきなり波乱を呼んでしまう子でしょ？気になってね♡」

「うわぁ…更にキツいわこれ…」

「多少は我慢しろ……まだこれでもマシな方だ」

「これでマシか……レベル（色んな意味で）高くね？」
　この時点で更に怠そうな顔になる。
「てか思ったんですけど…なんで姫様此処に居るの？」
「だって副会長だし」
「はー……副会長か……副会長なの？」
「副会長だが？ってなんだ宇宙人に遭遇したみたいな顔をして、そんなに驚いたか？」
「いや驚くでしょう、いや驚かない方が凄いと思うんですけど」
　まじまじと言われてるときょとんとした顔になる
「……そんなに驚く事と思うか？グリス」
「驚く事じゃない？この都市のお姫様が忙しい職務を自らやっているんだから」
　そうなのか…と呟きエルティアが軽く唸り始めたのでこっそりと帰ろうとしようとするがそもそもあの入り口前には最上兄弟の壁があるため帰れないと察した。
「帰ろうする気は満々なのは分かるけど…少し貴方に用事があってね」
　用事？と言う生徒会長の言葉の時点でもうロクでも無さそう感がプンプンする。
　でもそれで判断して断ると言う龍牙では無いのだ、取り敢えず人の話は聞いてからそれから判断しよう。
「…用事ってなんですか会長」
「用事って言うのはね…アレ」
　アレとはなんだ？と思い会長が指差す方向には最上兄弟が入って来るのは良いその次が問題だそのまま紙の束を机の上に置くと紙ドン‼？と置くしかもそれが二セット
「……なんですか？それ」
「目安箱に入ってた要望等の紙」
「あー…それどのくらい放置してたんですかね？」
「二時間の間にこんなに溜まってた。」
　耳を疑う事を聞いた今なんて言ったこの会長？

「二時間？…な訳無いですよね？そんな短時間で溜まるはずないでしょ？」
紙の束はもう見れば分かるぐらいの量であり確実に二セット合わせるだけで２００枚を優位に越える。
軽く唖然するが少し疑問が浮かんだ。
「てかなんでこんなに溜まったんですかね？普段はこんなに溜まらなはず…」
「あーその原因はね…取り敢えずその紙を一枚一枚見てみてちょうだい」
言われた通りに紙の束から何枚か取ってみて一枚一枚見て行くと
『この後龍牙君の予定はありますか？』
『龍牙君と少しお話したいので彼を教室に呼んでください』
『龍牙君に明日の買い物手伝って欲しい』
『鐵龍牙死ね鐵龍牙死ね鐵龍牙死ね鐵龍牙死ね（ｅｃｔ）』
『早く鐵龍牙を退学させろ』
「おい待ってくれよ…なぁ読んだだけで色々おかしいし、後半に至っては殺意ＭＡＸだろ…これ目安箱に入ってた紙だよな？…つまりあの紙束は…これに似た事が書いてあるのか…なぁ？なんで目安箱に入っているんだ？」
ジト目でアリスもといグリスに目線を移すと、軽く困った顔になってた。
「この学校はね…新しいものに敏感なのよね…どんなものでも敏感なのよ…例え人でも…」
「だからって俺に関係する事ではないだろ」
「それが関係するのよねー…」
は？と思うぐらい意味が分からない流石の龍牙も頭の上に？が何個も出てる。
「貴方色々と各方面に喧嘩売っちゃったのよ…」
「…いやそれはおかしいだろ、俺はただ教壇に立って自己紹介してから終えた後姫様達に話しかけられたりして…」
「それよ？こんな事が起きた原因は。」

「……いや意味が全く分からないのだが？」
「簡単に言うなら嫉妬や興味が複数生まれた結果なのよ…」
「いや知らなねぇよ…興味が湧いてるのはしょうがないとして嫉妬の件は勝手に自己中心的な考えの結果でしょう…」
こう言う自己中心的な思考と行動は色々と人間関係などに響いて最終的に危険な行動に出る可能性が大きい。
ならそう言うトラブルなどを生まない方法としては、もう完全無視が案外良いかもしれない
取り敢えず自分が悪いのか？と言われれば自分は悪く無いと言えるだって勝手に自己完結して自滅しているのだから、ならさっさとこの話を終えてさっさと休憩したい。
そう思ってた矢先にグリスの次の一言で色々と台無しになった。
「なら外で揉め事どうにかしてちょうだい？」
窓側に近付き中庭の様子を見ると見れば分かる通りの二グループが口論していた。
「何ですか？アレ……てか教壇に立ってた時に見てた集団かよ」
「あの2グループは右側が揺り籠姫（スリープ）見守り隊で左側がリーリス護衛隊、あの2グループ結構衝突が多いのよね……何処かでああやって揉め事してね……今回は多分体育館の時の件で揉め事でしょうね」
「……ファンクラブの衝突かよ…」
こほんとこのタイミングで咳をした姫様、嫌な予感がする。
「そう言う事になるな……という事でリュウガよ私の命令だ、アレ止めてこい」
「はい？」
またこの展開かよ……いい加減に助けてくれ神様と龍牙は願った。